高崎町文化財調査報告書

第４集

朴木（ほうのき）遺跡

1993

宮崎県北諸県郡高崎町教育委員会

高崎町文化財調査報告書第４集正誤表

	番号	誤	正
第１表	２０	鵜戸口	宇戸口
	４９	栗須	栗巣
	６２	日守地下式横穴墓群	仮屋尾（日守）地下式横穴墓群

序

高崎町は、宮崎県の南西部、西に霧島連山を仰ぎ、霧島山麓から広がる都城盆地の北西部にあたります。町内は、高崎川から大淀川ぞいに広がる平坦地帯と、緑の広がる山間地からなる豊かな自然環境に恵まれた町です。

この度の発掘調査により、県内で初めて弥生時代の石蓋土壙墓が確認されました。この発見により、本町の歴史に新たな一ページが加えられるとともに、研究資料としても活用されることが期待されます。

本書が、学術研究の資料として活用いただきますとともに、文化財の保護と啓発普及に役立てていただければ幸いです。

最後に、この発掘調査に際しましてご協力を賜りました関係者に心から厚くお礼申し上げます。

平成5年3月

高崎町教育委員会
教育長職務代理者　名頭園　政　利

例　　言

1．本書は、高崎町大字江平字朴木3639番地イで耕作中に発見され、昭和60年３月18日～26日に実施した朴木遺跡の試掘調査報告書である。
　なお、地元の人は「朴木」を「ふのき」と呼んでいる。

2．発掘調査は、高崎町教育委員会が主体となり、県文化課主任主事長津宗重が担当した。

3．調査組織は次の通りである。

調査主体　高崎町教育委員会
教　育　長　川　原　俊　夫
社会教育課長　長谷川　政　和
非常勤特別職　黒　木　昭　三
調査員　県文化課　主任主事　長　津　宗　重

4．発掘調査にあたっては、土地所有者　　の協力を得た。

5．本書の執筆・編集には長津が当たった。

6．石器の石材は宍戸章氏の御教示による。

7．土器の色調は農林水産省農林水産技術会議事務局監修の標準土色帖による。本報告の方位は磁　北である。またレベルは海抜絶対高である。

8．遺物は町教育委員会で保管している。

本文目次

序
例言

第Ⅰ章　序説 …… 1

第1節　発掘調査に至る経緯 …… 1
第2節　高崎町内の歴史的環境 …… 1

第Ⅱ章　遺構と遺物 …… 9

第1節　調査区の設定と概要 …… 9
第2節　包含層の状態 …… 9
第3節　縄文時代の遺構と遺物 …… 9
第4節　弥生時代の遺構と遺物 …… 21

第Ⅲ章　まとめ …… 34

表目次

第1表　主要な遺跡地名表 …… 2
第2表　縄文土器観察表 …… 16
第3表　石器計測表 …… 20
第4表　石蓋土壙墓計測表 …… 25
第5表　弥生土器観察表 …… 29
第6表　磨製石鏃計測表 …… 32

挿図目次

第1図　高崎町の主要な遺跡分布図 …… 3～4
第2図　土層断面図 …… 9
第3図　周辺地形図 …… 10
第4図　縄文時代遺物分布図 …… 11
第5図　縄文土器実測図（Ⅰ） …… 13
第6図　縄文土器実測図（Ⅱ） …… 14

第７図　縄文土器実測図（Ⅲ）…… 15
第８図　石器実測図（Ⅰ）…… 18
第９図　石器実測図（Ⅱ）…… 19
第10図　弥生時代遺構分布図 …… 22
第11図　石蓋土壙墓実測図（Ⅰ）…… 23
第12図　石蓋土壙墓実測図（Ⅱ）…… 24
第13図　弥生土器実測図（Ⅰ）…… 27
第14図　弥生土器実測図（Ⅱ）…… 28
第15図　磨製石鏃実測図 …… 33

図版目次

図版１　縄文土器（１～17）・縄文土器（19～31）…… 39
図版２　縄文土器（32～45）・磨石（１～７）・敲石（８・９）…… 40
図版３　敲石(10)・扁平打製石斧(11～13)・磨製石斧(14)・石包丁形石器(15・16)
・弥生土器（１～15）…… 41
図版４　弥生土器（17～26）・弥生土器（27～41）…… 42
図版５　弥生土器（42～53）・弥生土器（54～68）…… 43
図版６　縄文土器（24）・弥生土器（５・16・24・39・59・67）・SD１出土磨製石鏃 …… 44
図版７　ＳＤ１・ＳＤ１磨製石鏃出土状況・ＳＤ２・ＳＤ３ …… 45
図版８　ＳＤ３・ＳＤ４・Ｔ－10のＳＤ５とＳＤ11・ＳＤ５ …… 46
図版９　ＳＤ５・Ｔ－２のＳＤ６とＳＤ７・ＳＤ６・ＳＤ７ …… 47
図版10　ＳＤ８・ＳＤ９・ＳＤ９・Ｔ－６のＳＤ10 …… 48
図版11　ＳＤ10・ＳＤ11・ＳＤ11 …… 49

第Ⅰ章　序　説

第1節．発掘調査に至る経緯

当遺跡は行政区では高崎町大字江平字朴木3639番地イで、諸県山地の北西支脈の小起伏山地から南東へ伸びる小丘陵先端部の畑地で標高150～160m（比高20m）に位置し、大淀川の支流の炭床川を西に臨んでいる。

昭和58年12月22日に土地所有者がゴボウの作付けのためにトレンチャーで深耕作業をしたところ、土の中の板石に当たって作業ができないということを町教育委員会に連絡してきた。そこで町教育委員会の職員等が現地を調査したところ、土器片や石鏃が表採され遺跡であることが確認されたので、町教育委員会は遺跡の性格・内容を把握するために確認調査を行うことにし、調査員の派遣を県教育委員会文化課に依頼し、確認調査は昭和60年3月18日～26日まで行った。

第2節．高崎町の歴史的環境

高崎町は宮崎県の南西部に位置し、諸県山地山西支脈と都城盆地中・北部台地に属し、東側を大淀川、西側をその支流である高崎川が流れている。地形区分では山地が31%、シラス台地が27%と高く、標高は100～200mが74.2%である[1]。

町内の遺跡は、昭和58年に公表された遺跡分布図によれば62ヶ所であり、その多くは町教育委員会の黒木昭三氏の精力的な調査によるところが大である[2]（第1図）。その後、平成2・3年度に行われた遺跡詳細分布調査によって遺跡の数は165ヶ所（大字前田35ヶ所、大牟田31ヶ所、東霧島22ヶ所、縄瀬25ヶ所、江平31ヶ所、笛水21ヶ所）に増大した[3]。その結果によれば町内の遺跡は7グループに分れる。

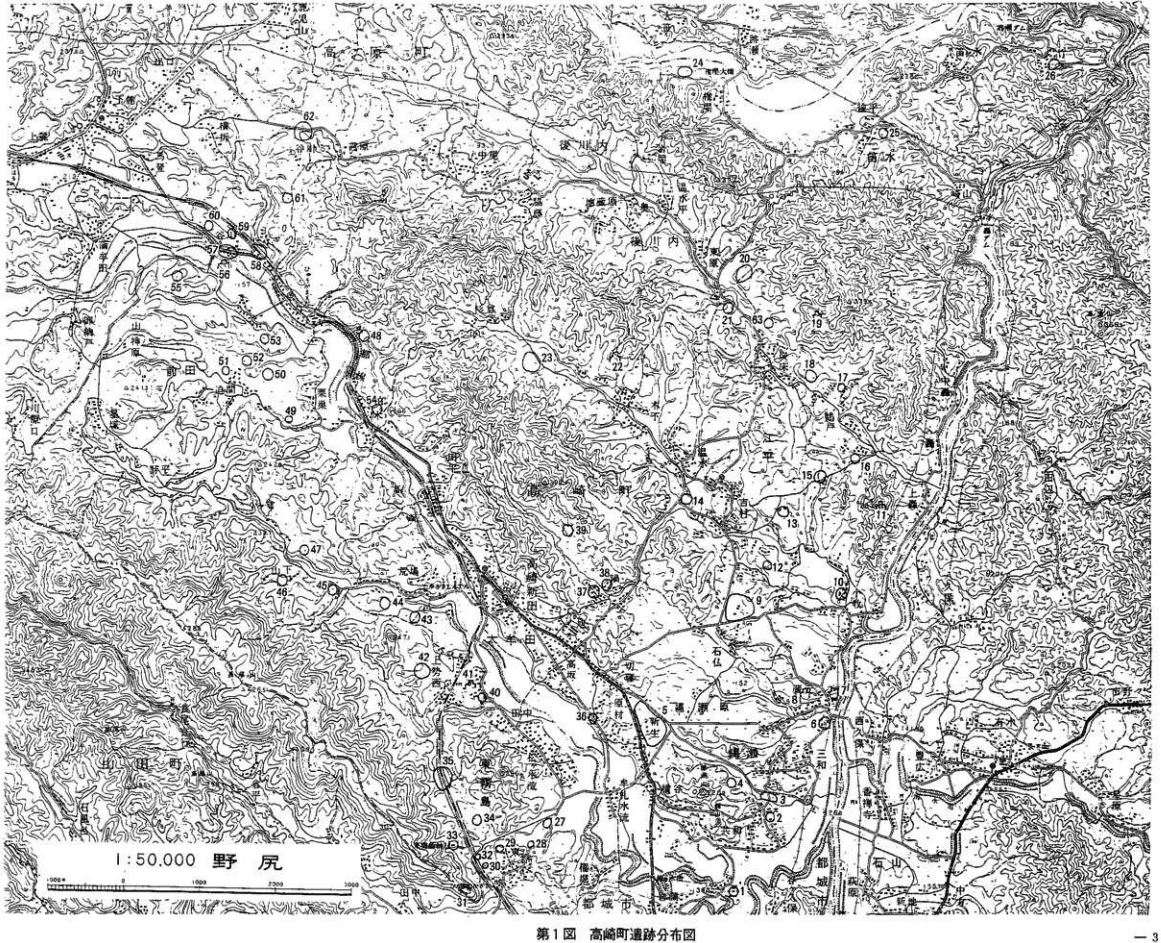
各時代の概要について述べる。

縄文時代の遺跡は、大淀川支流の炭床川中流域、木下川上流域、荒場川中・上流域、高崎川中流域の5グループに16ヶ所分布している。早期の遺跡としては楕円押型文土器が出土した砂子田遺跡[4]があるが、前・中期の遺跡は知られていない。前期の曽畑式土器は東隣の高城町の城ヶ尾遺跡[5]で出土しており、今後町内で発見される可能性は大である。日向においては中期の遺跡は希薄であるので、今後町内でも発見される可能性は少ない。後期になると遺跡が増大し、後期前半の沈線文（指宿式系）土器を出土した権現ヶ宇都遺跡・柏ノ木遺跡[6]・下原遺跡[7]、後期後半の黒色磨研土器を出土した宇都口遺跡、後期後半（西平式系土器）・晩期前半（黒色磨研土器）の北迫遺跡[8]、晩期前半の栗巣上原遺跡[9]が知られている。特に柏ノ木遺跡では286cm×270cmの方形プランの竪穴住居が検出され、また北迫遺跡でも竪穴住居の一部が検出されている。県内の後期の集落としては平畑遺跡[10]（宮崎市）、丸野第2遺跡[11]（田野町）、崩野遺跡（南郷町）、下弓田遺跡[12]・後藤野遺跡（串間市）のみであり、注目される。

弥生時代の遺跡は、高崎川左岸、荒場川中流域、木下川中・下流域、炭床川下流域に12ヶ所分布している。発掘調査が行われた今村遺跡[13]では中期前葉～中葉の亀の甲式甕を出土した。今回報告される朴木遺跡は、炭床川を西に臨む標高150～160mの丘陵先端部に位置し、石蓋土壙墓が11基検出された。土壙の石蓋はすべて1枚の偏平な板石である。特に1号石蓋土壙墓の床面全体から無茎磨製石鏃が20本も出土したのは特筆される。当石蓋土壙墓群は周辺か

第1表　高崎町内の主要遺跡地名表

番号	遺跡名	所在地（大字・字）	時代	番号	遺跡名	所在地（大字・字）	時代
1	樋之口	縄瀬・樋之口	古墳	33	東霧島神社	東霧島・鳩園	中世
2	横尾地下式横穴墓群	〃・横尾	古墳	34	下原	〃・下原	〃
3	横尾	〃・〃	不詳	35	豆付迫	〃・豆付迫	弥～古
4	山尻	〃・山尻	弥生	36	高坂前	大牟田・高坂前	古墳
5	原村上地下式横穴墓群	〃・原村山	古墳	37	鍋前第1	〃・鍋前	弥生
6	鳩越第1	〃・鳩越	〃	38	〃第2	〃・〃	〃
7	〃第2	〃・〃	縄文	39	鍋上	〃・鍋上	不詳
8	柳の城	〃・蔵元	中世	40	一向	〃・一向	縄文
9	塚原古墳群	〃・塚原	古墳	41	浮城	〃・西村前	中世
10	小牧	〃・小牧	不詳	42	北迫	〃・北迫	縄文
11	木場城	〃・宮谷	中世	43	上示野原	〃・上示野原	古墳
12	池ノ友	江平・池ノ友	弥生	44	黒勢戸	〃・黒勢戸	〃
13	大砂	〃・大砂	不詳	45	永迫第1	〃・永迫	縄文
14	佐渡	〃・坂元	弥生	46	山下	〃・大坪	〃
15	鵜ノ原地下式横穴墓群	〃・西原	古墳	47	永迫第2	〃・〃	弥生
16	鵜戸	〃・鵜戸	弥生	48	柏木	〃・柏木	縄文
17	大川毛A	〃・大川毛	縄文	49	栗須	前田・栗須上原	古墳
18	〃B	〃・〃	弥生？	50	栗須第2	〃・〃	弥生
19	すかしの城	〃・柳田	中世	51	源太	〃・源太	縄文
20	鵜戸口	〃・鵜戸口	縄文	52	上所迫	〃・上所迫	古墳
21	砂子田	〃・砂子田	〃	53	下朝倉	〃・下朝倉	縄文
22	城の岡	〃・木下	中世	54	青木	〃・下原	古墳
23	権現ケ宇都	〃・権現ケ宇都	縄文	55	池山口	〃・池山口	旧石器？
24	上原	笛水・上原	〃	56	高崎城	〃・丸岡	中世
25	池田	〃・池田	弥生	57	様屋敷	〃・谷川	弥生
26	竹元	〃・笛水東原	縄文	58	烏越前	〃・烏越前	〃
27	政所第1	東霧島・政所	古墳	59	烏越	〃・烏越	縄文
28	〃第2	〃・〃	平安	60	烏井原	〃・烏井原	〃
29	今村	〃・今村	弥生	61	仮屋尾	〃・仮屋尾	弥～古
30	中野第1	〃・中野	古墳	62	日守地下式横穴墓群	〃・〃	古墳
31	陣の端	〃・〃	中世	63	朴木	江平・朴木	縄～弥
32	中野第2	〃・〃	弥～古				



第1図　高崎町遺跡分布図

ら出土した鋤先口縁の須玖式の高坏であるので中期後半に比定される。県内では弥生時代の石蓋土壙墓は初例であるので、墓制の変遷・地域性を知る上で注目されると共に、1号石蓋土壙墓の磨製石鏃の多数副葬は共同体の構造・発展段階を推定する上で貴重である。様屋敷第2遺跡[14]は一辺3.4m以上を計る方形プランの竪穴住居の一部が検出され、重弧文土器と高坏等が出土し、後期末葉に比定される。重弧文土器の時期は西健一郎氏分類の第4段階Cに相当する。昭和40年に縄瀬字塚原の畑の削平中に両端抉り入り方形石庖丁が出土している。

古墳時代の遺跡は15ヶ所知られている。塚原古墳群は大淀川左岸の砂礫台地（成層シラス台地面）の縄瀬台地群の標高154m（比高28m）に位置し、前方後円墳1基・円墳19基・方墳1基[15]・地下式横穴墓6基で構成されている。1号墳は全長67.6m、後円部径33.4m、同高さ6.0m、前方部長さ30.0m、同幅22.0m、同高さ4.5mの前方後円墳である。方墳は現存していないが、県内では数基しか知られておらず注目される。地下式横穴墓の構造は1・3～5号が平入り横長長方形・楕円形・不定形プランである[16]。特に1号地下式横穴墓は羨門石閉塞平入り片袖家形横長長方形プランで、竪坑は横長長方形で、棚状施設には鉇1を、床面に剣1を副葬している。1号地下式横穴墓も羨道の長さが長い。3体の人骨は奥から熟年男性・幼児・壮年女性の順である[17]。3号地下式横穴墓は平入り片袖横長楕円形プランで剣1が出土している。特に2号地下式横穴墓の壮年男性から鉄鏃と共に鉄釧が出土しているのは注目される。当地下式横穴墓群は1・3号地下式横穴墓が剣を、2号地下式横穴墓が鏃を有している以外は副葬品を有しておらず、階層のレベルダウンが著しい。大淀川上流域において前方後円墳を有する古墳群はここと南南東8.9kmの牧ノ原古墳群（前方後円墳3基（全長50.4m、45.4m、38.6m）・円墳10基・地下式横穴墓1基）、南6.3kmの志和池古墳群（前方後円墳1基（後円部径31.0m）・円墳11基・地下式横穴墓6基）だけであり、注目されるが、塚原古墳群の首長墓の系譜が一代で断絶しているので、都城盆地を経済基盤として3古墳群の中で首長権の交代というような動的な在り方で首長墓の系譜を追う必要がある。横尾地下式横穴墓群は高崎川左岸の標高150mの丘陵上に位置し、地下式横穴墓が3基調査されている。3号地下式横穴墓は平入り片袖横長長方形で、壮年男性に剣1を副葬している。羨門を軽石で閉塞している。2号地下式横穴墓は羨道が非常に長い平入り片袖ドーム形横長長方形である。1・2号地下式横穴墓とも女性を初葬としているが、副葬品は刀子さえない。3基のうち2基が女性が初葬である。横尾地下式横穴墓の北、縄瀬小地下式横穴墓群[18]は3基のうちの昭和46年調査の2号は平入り両袖ドーム形横長楕円形で、壮年の女性である。昭和42年発見の1号地下式横穴墓からは壮年男性・熟年男性に剣1・刀1が副葬してあるのに対して、47年発見の3号地下式横穴墓は壮年男性2体・小児Ⅱ（13～14才）に槍1が副葬してある。横谷原村古墳群[19]は高崎川左岸の標高154m（比高21m）に位置し、円墳8基・地下式横穴墓7基で構成されている。地下式横穴墓の構造は6号地下式横穴墓を除くとすべて平入り片袖型横長長方形プランで、羨道部が長いのが特徴である。2号地下式横穴墓からは剣2・刀子2・鏃6が、4号地下式横穴墓から剣4・イモガイ製貝輪1が出土しており、5世紀後半～6世紀前半の地下式横穴墓である。5・7号地下式横穴墓が平入り片袖型横長長方形プランであるのに対して、6号地下式横穴墓は平入り両袖型横長長方形プランである。3基とも羨道部が長い特徴を有する。副葬品は貝輪を除くと刀子のみであり、刀剣・鏃を欠如している。6号

地下式横穴墓の２号人骨（熟年の男性）の左側前腕部にイモガイ製横型貝輪８個が着装してあったが、松下氏は人骨の形態的特徴から、これは本来１号人骨（壮年の女性）が生前着装していたもので、１号被葬者の死後、２号被葬者が着装したと推定している。また他の人骨が「低・広顔傾向」であるのに対して、６号地下式横穴墓の２体の人骨は「高顔傾向」を示している[20]。なお５～７号地下式横穴墓はすべて女性が初葬であり、注目される。仮屋尾地下式横穴墓群[21]は日守地下式横穴墓群（高原町）と同一の古墳群である。１・３号地下式横穴墓が平入り片袖型家形横長長方形であるのに対して２号は両袖方形プランである。１・３号地下式横穴墓が平入り片袖型家形横長長方形であるのに対して２号は両袖方形プランである。１・３号地下式横穴墓とも棚状施設に鏃を副葬している。３号地下式横穴墓は５体の人骨が推定され、剣・刀子・鉇・鏃の組み合わせである。鏃には圭頭以外に二段逆刺、柳葉などが出土し、多種である。仮屋尾からは男女各１体の人骨が出土している。昭和46年発見の宇野原地下式横穴墓からは壮年女性に刀子が副葬されていた。平[25]地下式横穴墓からは老年男性の人骨が出土しているが、大正年間に発見された地下式横穴墓からは刀が出土している。当地域の地下式横穴墓は構造から見れば塚原地下式横穴墓群と仮屋尾地下式横穴墓群で平入り片袖家型横長長方形プランが存在し、剣を副葬しているが、塚原は羨道部が長い特徴を有している。平入り片袖家型横長長方形プランは野尻町・高原町・須木村・国富町で見られる構造である。原村上地下式横穴墓群と横尾地下式横穴墓群は羨道部が長い平入り片袖横長長方形である。羨道部が長い特徴は菓子野地下式横穴墓群（都城市）にのみ見られる。副葬品から見る限りにおいては剣を有する地下式横穴墓が群で１～２基存在するだけで、宮崎平野部やえびの盆地に見られる甲冑・鏡に代表されるような階層の突出はないばかりか、馬具の副葬も見られない。鏃や刀子などを副葬している地下式横穴墓も少ない。また女性を初葬とするものが17基中８基で割合が高い。

古墳時代初頭の集落である上示野原遺跡は、大淀川の支流である荒場川に開析された標高150m～180m（比高約20m）のシラス台地上に位置し、円形プランを基調とする日向型間仕切り住居[22]１軒、方形プランの竪穴住居が発掘調査された。日向型間仕切り住居である２号住居は約80㎡と大型であるのに対して、方形プランの１号住居は41.3㎡、３～５号住居は20㎡代と小型である。集落の一部しか発掘調査されていないが、当地域の当時期における集落構造・構成を考える上で示唆的な様相を示している。

歴史時代の遺跡としては、平安時代前半（10世紀前半）の越州窯青磁碗を出土した政所第２遺跡[23]（大字東霧島）、平安時代～中世の掘立柱建物３棟を検出した下原遺跡がある。

中世の山城・砦は龍虎山城（高崎城）・木場砦・陣ノ鼻砦・浮城岡・城山・徳ノ岡・柳ノ城・総城・すかしの城[24]が知られている。このうち調査された木場城は大淀川上流左岸の標高263mの小高い山頂にある。城の構造は６ヶ所の曲輪と土塁・竪堀からなり、特に竪堀が畝状に10本並んでいる畝状竪堀群は南九州では初見である[25]。城の築造時期は元亀元（1570）年か慶長５（1600）年と推定されている。昭和63年の試掘の結果[26]、第１竪堀では埋土から享保元～２（1716～17）年を起源とする新燃岳スコリアが検出されている。第３竪堀では丘陵の基盤を成す岩盤を削っている。平成元年12月４日～２年２月４日の試掘の結果[27]、曲輪Ⅲの西側では側方に石を積んだ通路が確認され、曲輪Ⅲの虎口は正面に径１m程の石で石垣がくま

れていた。建物跡は未確認であるが、柱穴が検出されず、礎石と思われる数個の石を確認したのみである。

当地域は縄文時代後期と古墳時代初頭に大きな画期が見られ、特に弥生時代中期末の石蓋土壙墓の在り方、あるいは古墳時代における前方後円墳と地下式横穴墓の共存の在り方、そしてその両時代の狭間での日向型間仕切り住居の在り方に山間部という地域での文化・政治といううねりに如何に対応していったか朧げながらも読み取ることができる。各時代の具体的な描写は今後の発掘調査に期待したい。

註

（1）経済企画庁総合開発局『土地分類図（宮崎県）』 1974

（2）高崎町史編纂委員会「先史時代」『高崎町史』高崎町 1990

（3）高崎町教育委員会「遺跡詳細分布調査報告書」『高崎町文化財調査報告書』第3集 1992

（4）石川恒太郎「高崎町炭床出土の縄文土器について」『宮崎県文化財調査報告書』第16集 宮崎県教育委員会 1972

（5）長津宗重・寺師雄二「城ヶ尾遺跡」『高城町文化財調査報告書』第1集 高城町教育委員会 1989

（6）岩永哲夫「柏ノ木遺跡発掘調査報告」『宮崎県文化財調査報告書』第16集 宮崎県教育委員会 1972

（7）茂山 護「下原遺跡」『九州縦貫自動車道埋蔵文化財調査報告（3）』 宮崎県教育委員会 1980

（8）面高哲郎「北迫遺跡発掘調査報告」『宮崎県文化財調査報告書』第26集 宮崎県教育委員会 1983

（9）茂山 護「栗巣上原遺跡」『九州縦貫自動車道埋蔵文化財調査報告（3）』 宮崎県教育委員会 1980

(10) 昭和60年に宮崎大学が発掘調査したが、未報告。

(11) 長津宗重・菅付和樹「丸野第2遺跡」『田野町文化財調査報告書』第11集 田野町教育委員会 1990

(12) 石川恒太郎他「下弓田遺跡」『日向遺跡総合調査報告書』第1輯 宮崎県教育委員会 1961

(13) 茂山 護「今村遺跡」『九州縦貫自動車道埋蔵文化財調査報告（3）』 宮崎県教育委員会 1979

(14) 北郷泰道「様屋敷第1・2遺跡」『高崎町文化財調査報告書』第2集 高崎町教育委員会 1990

(15) 瀬之口伝九郎「日向国高崎村の古墳 特に方形墳について」『考古学雑誌』第16巻第12号 日本考古学会 1926

(16) 石川恒太郎「高崎町塚原地下式古墳調査報告」『宮崎県文化財調査報告書』第14集 宮崎県教育委員会 1969

石川恒太郎「高崎町塚原地下式古墳調査報告」『宮崎県文化財調査報告書』第15集
宮崎県教育委員会　1970
(17) 松下孝幸「高崎町出土の古墳時代人骨」『高崎町文化財調査報告書』第1集1988
(18) 栗原文蔵「宮崎県北諸県郡高崎町縄瀬小学校校庭の地下式横穴」『九州考古学』
第41号　九州考古学会　1971
石川恒太郎「高崎町縄瀬小学校校庭の地下式古墳調査報告」『宮崎県文化財調査報告書』
第16集　宮崎県教育委員会　1972
石川恒太郎「高崎町横尾地下式古墳調査報告」『宮崎県文化財調査報告書』第16集
宮崎県教育委員会　1972
(19) 石川恒太郎「北諸県郡高崎町横谷の地下式古墳」『宮崎県の考古学』吉川弘文館1968
石川恒太郎「高崎町横谷の地下式古墳」『増補　地下式古墳の研究』ぎょうせい1979
岩永哲夫「高崎町原村上地下式横穴調査報告」『宮崎県文化財調査報告書』第18集
宮崎県教育委員会　1976
日高正晴「横谷原村地下式古墳発掘調査」『宮崎県文化財調査報告書』第19集　1977
面高哲郎・菅付和樹「原村上地下式横穴墓群」『高崎町文化財調査報告書』第1集
高崎町教育委員会　1988
(20) 松下孝幸「高崎町出土の古人骨」『高崎町史』高崎町　1990
(21) 石川恒太郎「高崎町仮屋尾地下式古墳調査報告」『宮崎県文化財調査報告書』第15集
宮崎県教育委員会　1970
茂山　護他「日守地下式横穴54－1～4号」『宮崎県文化財調査報告書』第22集
宮崎県教育委員会　1980
(22) 長津宗重「日向型間仕切り住居研究序説」『宮崎学園都市遺跡発掘調査報告書』
第2集　宮崎県教育委員会　1985
(23) 面高哲郎「高崎町東霧島出土の輸入陶磁器」『宮崎考古』第6号　宮崎考古学会
1980
(24) 平部嶠南『日向地誌』　1884
(25) 八巻孝夫「南九州の畝状空堀群の城－宮崎県・高崎町の木場城(仮称)について－」
『中世城郭研究』第3号　1989
(26) 北郷泰道「木場城跡」『高崎町文化財調査報告書』第2集　高崎町教育委員会　1990
(27) 山崇　薫「木場城跡」『日向の中世山城の現状と課題』資料集　宮崎考古学会　1990

第Ⅱ章　遺構と遺物

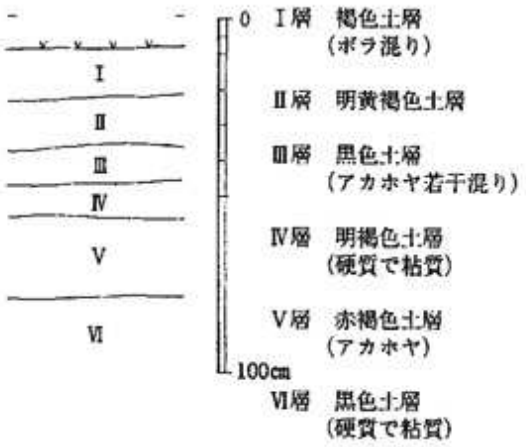
第1節　調査区の設定と概要

朴木遺跡（高崎町大字江平字朴木）は、諸県山地の北西山地北西支脈の小起伏山地から南東へ伸びる小丘陵先端部で標高150～160m（比高20m）に位置し、大淀川の支流の炭床川を西に臨んでいる（第3図）。

当遺跡は昭和58年12月にゴボウ作付けのためにトレンチャーを入れた所、石に当たるということで届けがあり、高崎町教育委員会が昭和60年3月18日から26日まで試掘調査を行った。その結果、弥生時代中期末の石蓋土壙墓11基が検出され、縄文時代後・晩期土器、弥生時代中・後期土器、石器などが出土した。

第2節　包含層の状態

当遺跡の基本層序は、第Ⅰ層が褐色土層（ボラ混じりの耕作土）、第Ⅱ層が明黄褐色土層、第Ⅲ層が黒色土層（アカホヤ若干混じる）、第Ⅳ層が明褐色土層（硬質で粘質）、第Ⅴ層が赤褐色土層（アカホヤ層）、第Ⅵ層が黒色土層（硬質で粘質）である（第2図）。



第2図　土層断面図

第3節　縄文時代後・晩期の遺構と遺物

縄文後・晩期の土器や磨石・敲石・磨製石斧・打製石斧などの石器が出土したが、遺構は検出されなかった。遺物は調査区の北部に特に分布し、T－5から集中して出土した(第4図)。

（1）縄文土器

縄文土器は口縁部の特徴により形態分類を行い、土器観察表（第2表）を作成した。

深　鉢

A類　（第5図1・2）

波状口縁部に連続する瘤状突起を巡らせ、突起の下位に棒状工具による連続刺突文を施している。

B類　（第5図3・4）

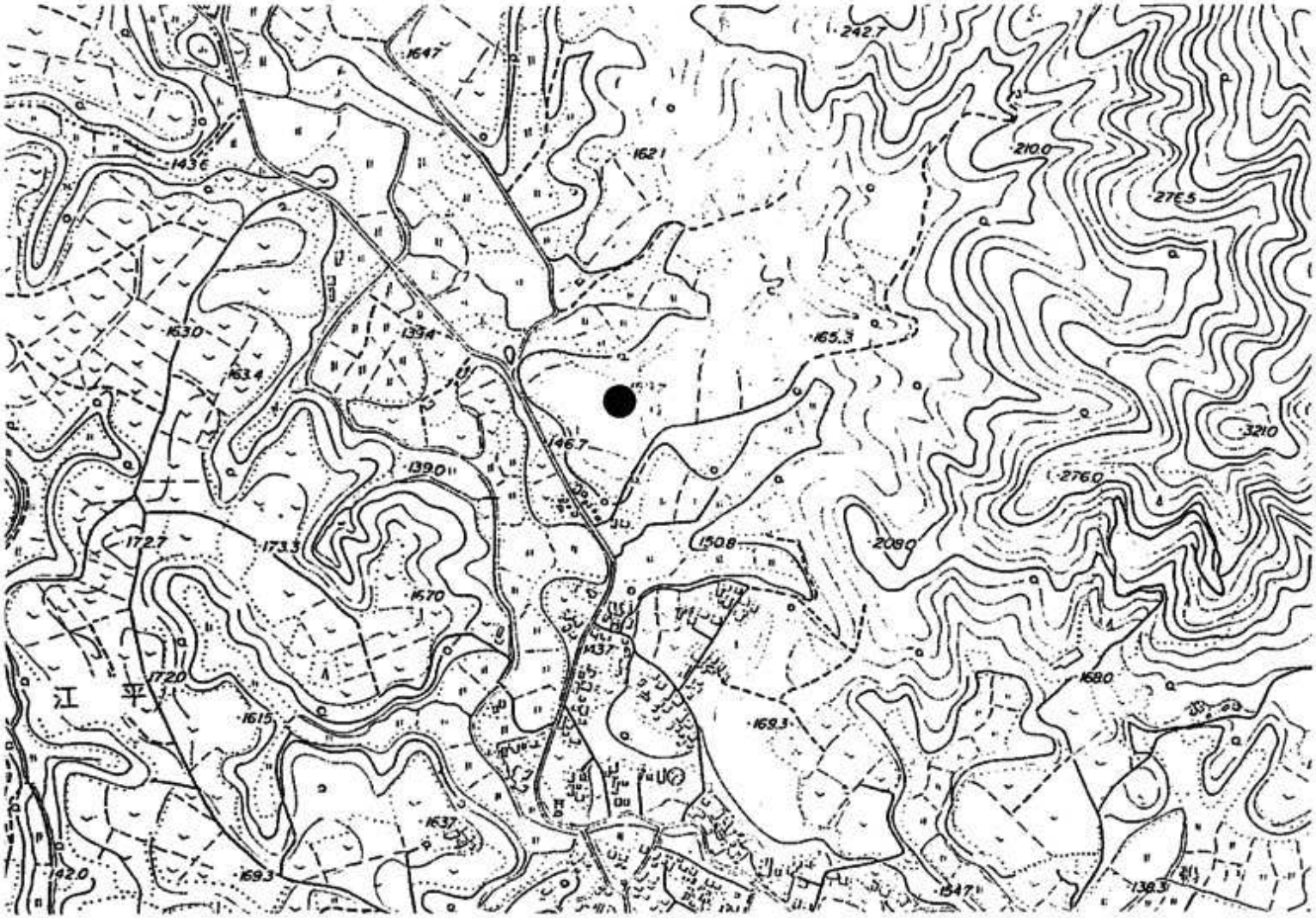
平口縁部はやや内傾し、外面に2～3条の凹線を施す。外面はヘラナデを施す。三万田式土器に比定される。

C類　（第5図5）

波状口縁部が上下に肥厚し、端部は平坦に仕上げている。外面に途切れた1条の沈線を、波頂部に刺突文を施している。外面はヘラナデを施している。三万田式土器に比定される。

D類　（第5図10～20、第6図21・22）

口頸部が斜め方向に長く伸び、胴部は丸く膨らむ無文の土器である。口縁端部は平坦に仕上げている。底部は上げ底である。内外面とも横方向のヘラナデを施している。10は頸部と体部の屈曲は緩やかである。11は10より口頸部の伸びが著しい。20はかなりきつい上げ底で、


242.7
1647
1621
210.0
276.5
143.6
163.0
163.4
139.4
165.3
146.7
139.0
321.0
276.0
172.7
173.3
150.8
208.0
167.0
1437
168.0
172.0
江 平
161.5
169.3
163.7
142.0
169.3
154.7
138.3

第3図　周辺地形図

胴部が緩やかに丸みを持ちながら伸びている。三万田式土器に比定される。

E類　（第5図7）

口縁部が断面三角形で、上下に貝殻腹縁刺突文を二段に施す。外面はナデを、内面は貝殻条痕を施している。市来式土器に比定される。

F類　（第5図9）

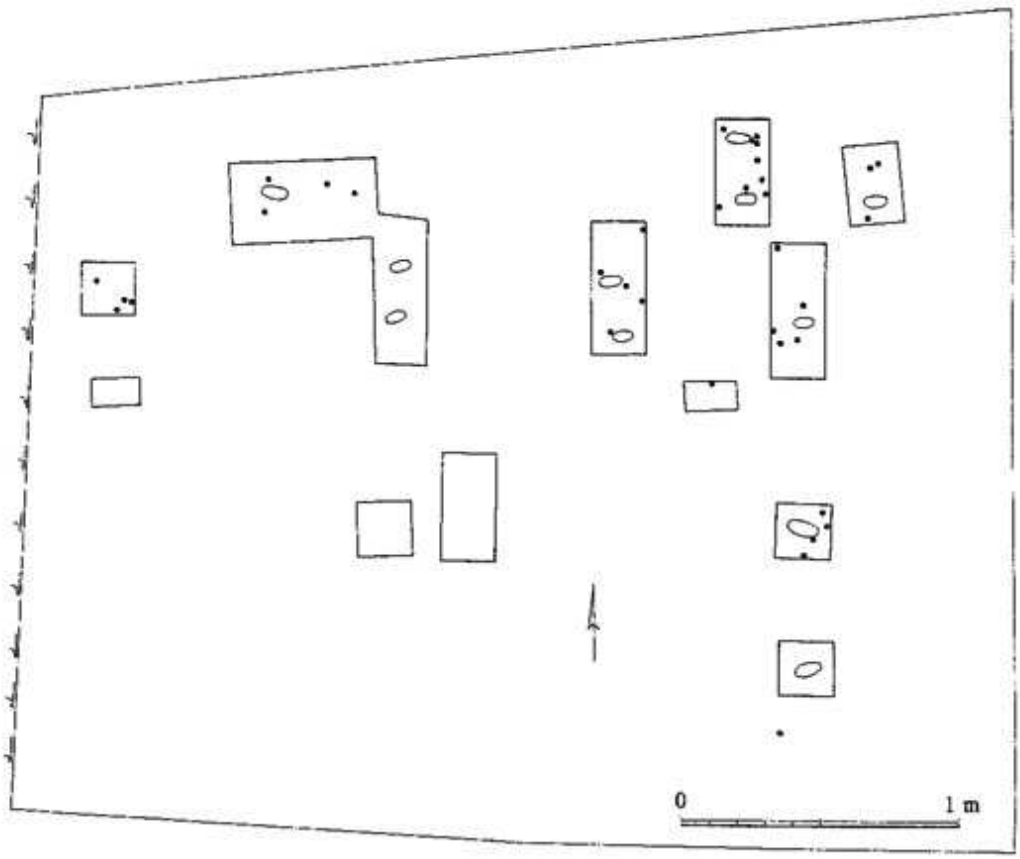
口縁部に複数の凹線を施し、内外面ともヨコナデヘラ磨きを施している。御領式土器に比定される。

G類　（第6図25～30）

口縁部の直下に一条の突帯が巡る土器である。

G－1類　（第6図25）

突帯に刻み目を有しない土器である。25は断面三角形の低い突帯である。



第4図　縄文時代遺物分布図

G－2類　（第6図26～29）

平口縁部の直下に1条の刻み目突帯を有する土器である。26と27が斜方向の細い刻みであるのに対して、28の縦方向の刻みは幅が1㎝と広い。28の外面のスス付着が著しく、内面は丁寧なヘラナデを施している。29は口縁部を欠如しているが、縦方向の刻みである。

G－3類　（第6図31）

平口縁部の直下に1条の刻み目突帯を、その下位に1条の刻み目突帯を有する。突帯の断面は先端の鋭い高い三角形である。突帯の刻み目は2本を単位として交互に斜方向に入れている。内外面とも横方向のヘラナデを施している。

底部　（第6図32～46）

底部は15点出土しているが、底部まで分かる完形の土器があまり出土していないので、上記のどの類の土器にどの底部が対応するのか不明である。ここでは、一括して取り上げ、立ち上がりの特徴で次のように分けた。

上げ底（32～38）、上げ底の小さな底面から真っ直ぐに立ち上がり大きく広がるもの（39・40）、底面から真っ直ぐに立ち上がるもの（41～43）、底面が外へ張り出してその上部が若干くびれているもの（44～46）などが見られる。なお上げ底のものが最も多い。

浅　鉢

A類　（第5図8）

稜線が入るほど胴部の張りが明瞭で、外面は横方向のヘラ磨きである。御領式土器に比定される。

B類　（第6図23）

口縁部が大きく直線的に伸び、口縁部と胴部には明瞭な段を有し、段付近に2条の沈線を施している精製浅鉢である。口唇部は平坦に仕上げている。内外面とも丁寧なヘラ磨きを施している。

C類　（第6図24）

胴部から口縁部はほぼ直線的に伸び、口唇部でわずかに外反する粗製浅鉢である。内外面ともナデを施している。

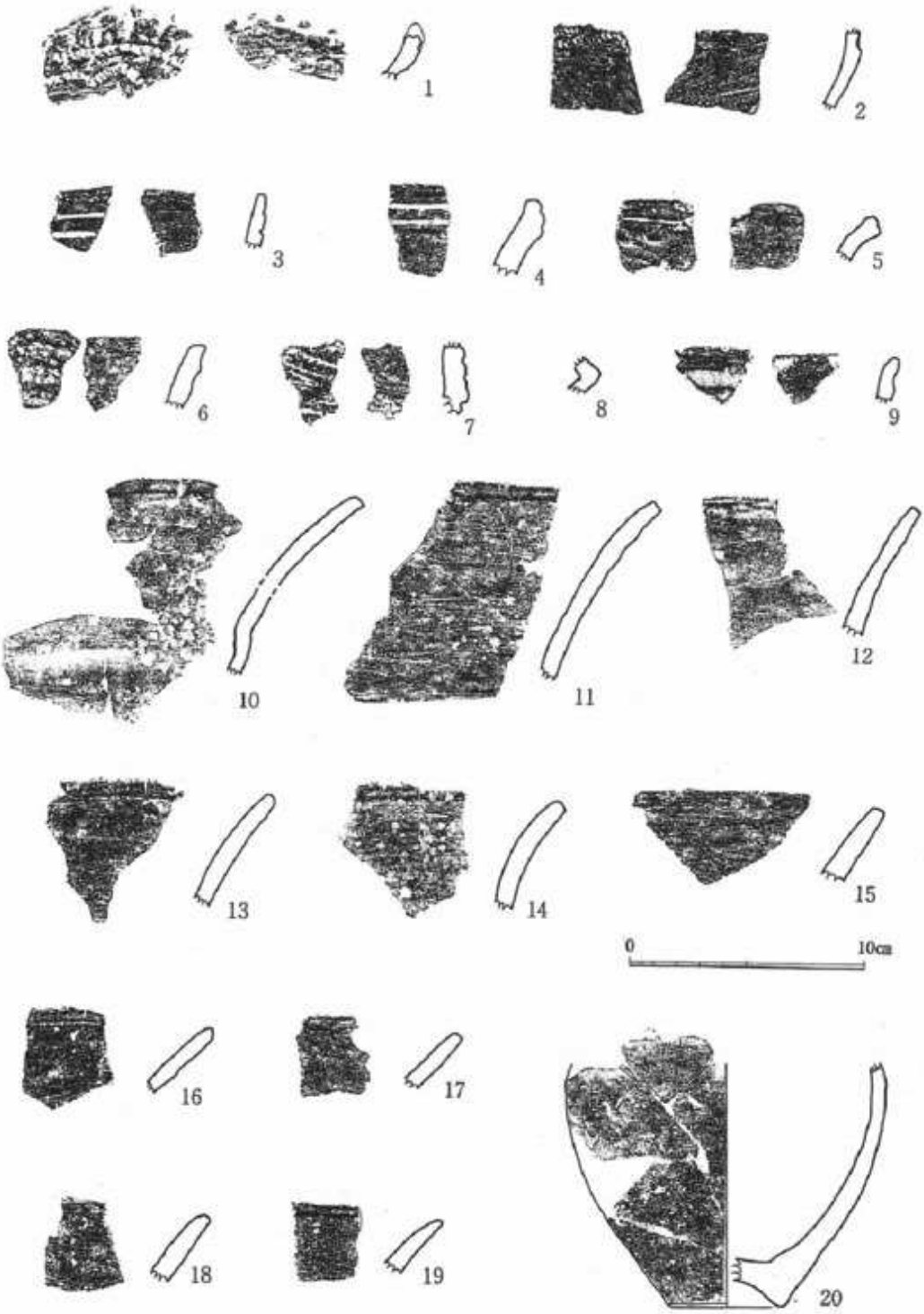
（2）石器　（第8～9図）

今回の調査では石器が調査区の北部のT－5から集中して出土した。その16点の内訳は磨石・敲石が7点（43.8%）、敲石が3点（18.8%）、打製石斧が3点（18.8%）、磨製石斧が1点（6.2%）、石庖丁形石器が3点（18.8%）であり、石皿・打製石鏃・石錘を欠如している。石器組成の特徴としては、磨石の量が多い点、石錘の欠如などである。

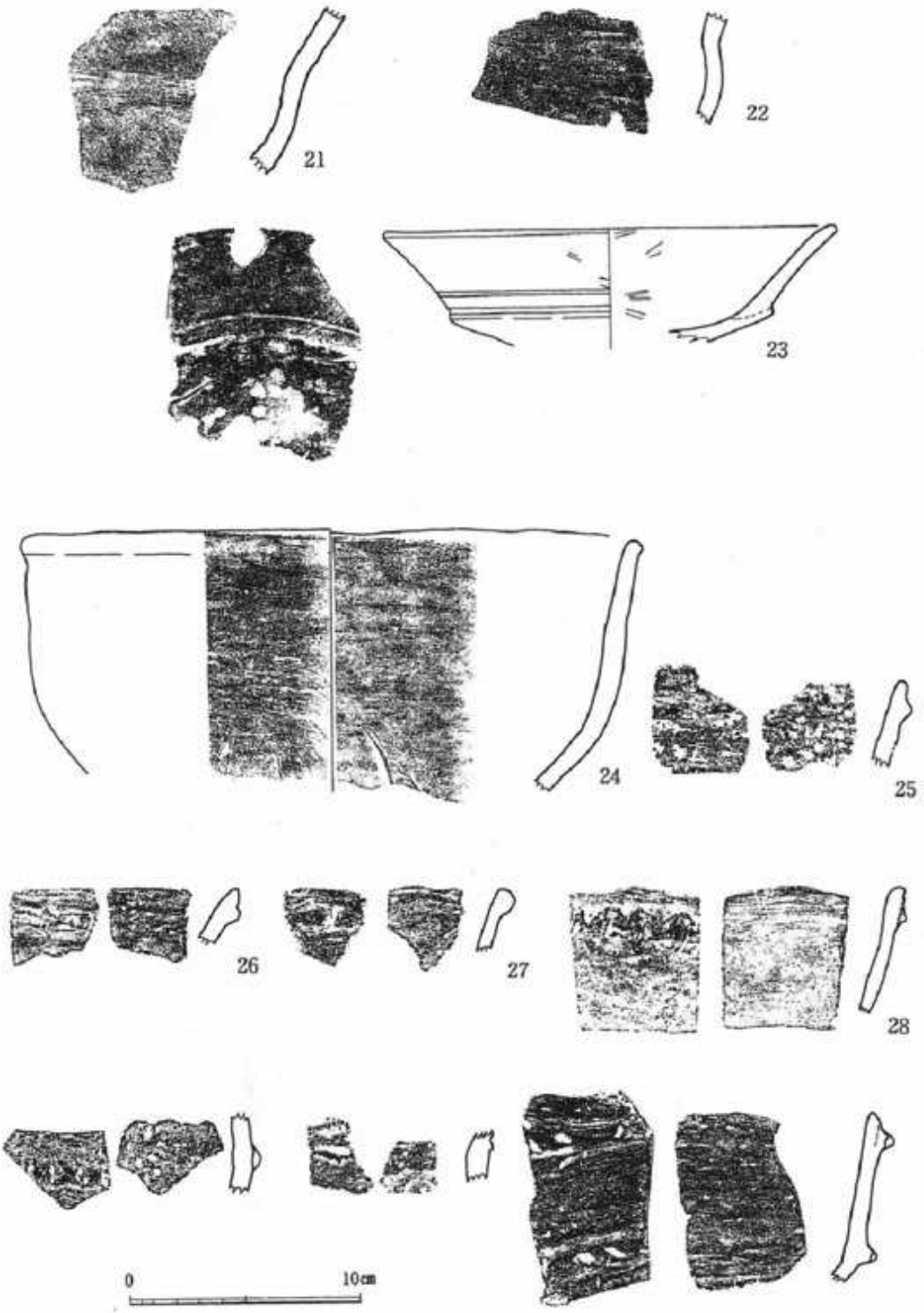
1．磨石・敲石　（第8図1～7）

表裏面は研磨して磨石として、側面は敲打して敲石としても利用している。石器全体の43.8%の7点が出土している。石材は安山岩が4点、砂岩が3点である。磨石は形態によって次のように分かれる。

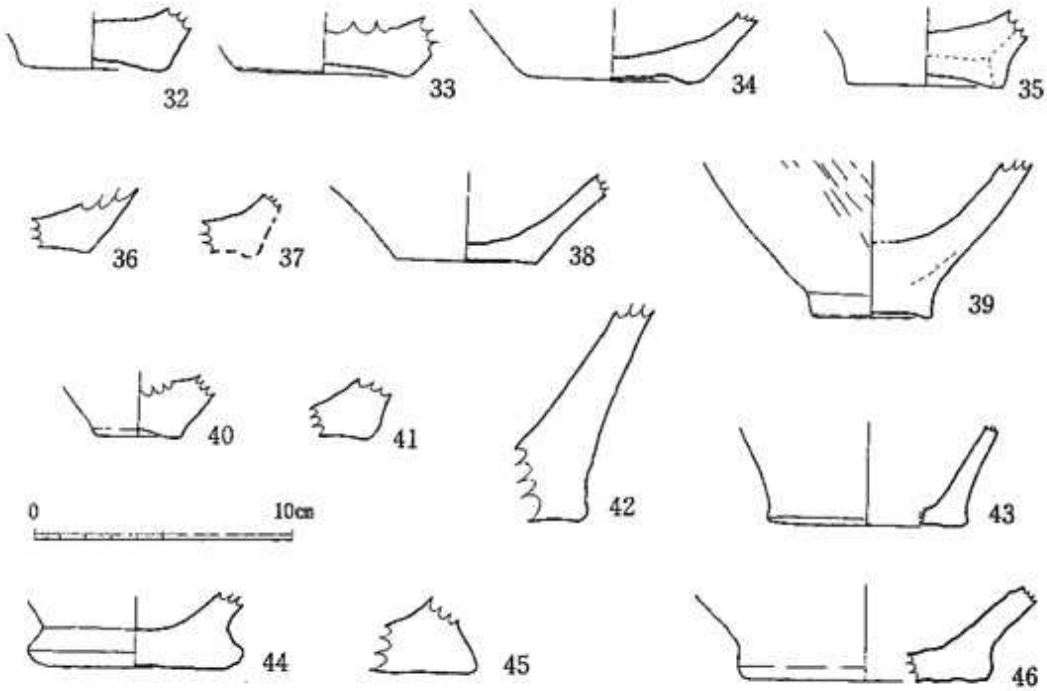
磨石Aは長さと幅がほぼ等しく、平面形は円形で、断面は楕円形である（1～5）。大きさは長さ10.1㎝～11.6㎝、幅8.9㎝～10.4㎝、厚み4.6㎝～5.2㎝、重さ600g～1,050gであり、平均は長さ11.0㎝、幅9.9㎝、厚み5.2㎝、重さ849gである。



第5図　縄文土器実測図（Ⅰ）



第6図　縄文土器実測図（Ⅱ）



第７図　縄文土器実測図（Ⅲ）

１は半分欠如し、側面は敲打している。長さ12.4cm＋α、幅8.0cm＋α、厚み6.2cm、重さ637ｇ＋αである。２は半分欠如し、側面は敲打している。長さ6.6cm＋α、幅9.3cm、厚み4.5cm、重さ314ｇ＋αである。１・２とも表裏面とも全面研磨しているが、両面とも丸味を有する。３は半分欠如しており、側面は敲打している。表裏面とも全面研磨しており、両面とも平坦である。長さ8.2cm＋α、幅4.8cm＋α、厚み4.6cm、重さ252ｇ＋αである。４はほんの一部分で、側面の敲打は著しい。表裏面とも全面研磨しており、片面は平坦である。長さ5.3cm＋α、幅3.0cm＋α、厚み3.8cm、重さ68ｇ＋αである。５はほぼ完形品で、長さ9.8cm、幅9.4cm、厚み3.2cm、重さ400ｇである。表裏面ともほぼ平坦に全面研磨しており、側面は敲打している。石材は１・３が砂岩、２・４・５が安山岩である。

磨石Ｂは長さと幅の比が３：２で平面形が楕円形である（６・７）。６は完形品で、長さ15.0cm、幅10.1cm、厚み6.2cm、重さ1,400ｇである。表裏面とも全面研磨しており、両面とも平坦である。側面に僅かに敲打の痕跡がある。７は側面は敲打しており、片側の頭部を欠如している。表裏面とも研磨しており、両面とも平坦である。長さ12.4cm＋α、幅8.4cm、厚み3.9cm、重さ600ｇである。石材は６が安山岩、７が砂岩である。

２．敲　石　（第８図８～10）

敲石は石器全体の18.8％の３点が出土しているが、磨石と共用の７点を加えると62.5％の10点である。石材は８・９は安山岩、10は砂岩である。

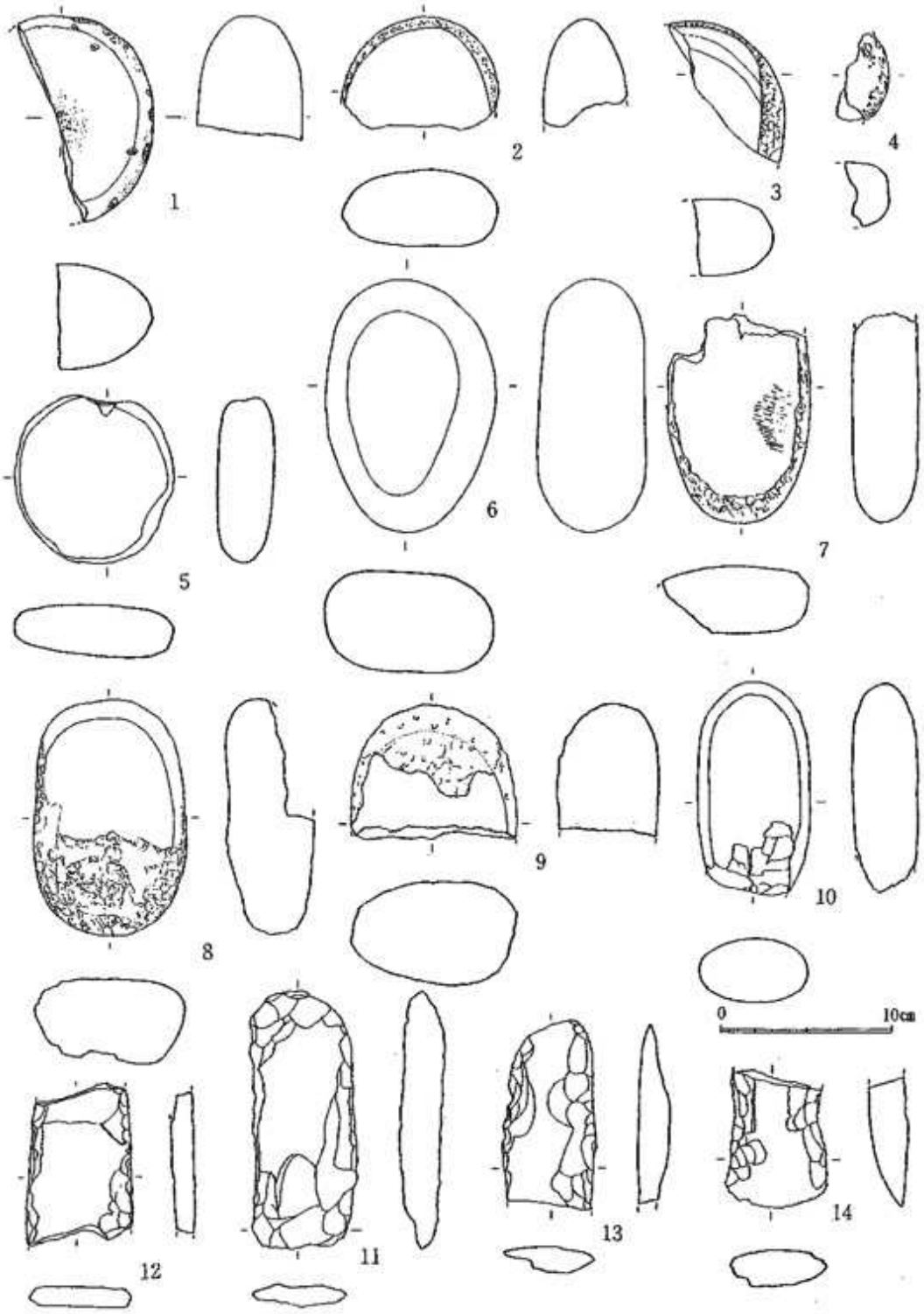
敲石Ａは長さと幅の比が３：２で、平面形と断面形は楕円形である（８）。８は側面と頭部を著しく敲打している。長さ14.9cm、幅9.0cm、厚み5.0cm、重さ800ｇ＋αである。

敲石Ｂは長さと幅がほぼ等しく、平面形が円形で、断面形は楕円形である（９）。９は半

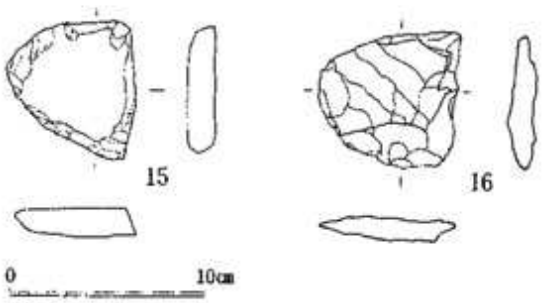
第2表　縄文土器観察表

番号	トレンチ	器形	器部	器面調整			文様		胎土	色調		焼成	備考
				外面	内面	底面	外面	内面		外面	内面		
1	T−8	深鉢	口縁部	ナデ	ヨコナデ		口縁部一複数のこぶ状突起 二段による連続刺突文		0.5mm以下の透明で光沢のある砂粒 1mm以下の黒、淡黄色の砂粒少量含む	にぶい橙(7.5YR7/4) 褐灰(7.5YR4/1)	にぶい橙(7.5YR5/4)	良好	波状口縁
2	T−8	深鉢	口縁部	斜方向の貝殻条痕後、ナデ	斜方向の貝殻条痕後、ナデ				透明黒色の光沢のある微細粒を多量 0.5mm〜1mmの乳白色の粒少量含む	明黄褐(10YR6/6) にぶい褐(7.5YR5/3)	橙 (7.5YR6/6)	良好	
3	T−9	深鉢	口縁部	ナデ	ナデ		二条の沈線		2mm以下の茶色、淡黄色の砂粒を含む	にぶい褐 (7.5YR6/3)	灰褐 (7.5YR6/2)	良好	
4	SD1	深鉢	口縁部	ていねいなナデ	ナデ		三条の沈線		微砂〜2mmの淡黄色、黒色で光る透明で光る透明で光る	橙 (5YR6/8)	橙 (7.5YR7/6)	良好	
5	表採	深鉢	口縁部	ナデ	ナデ				0.5mm〜1mmの茶色、乳白色の粒、茶色透明の光沢のある微細粒を含む	にぶい黄橙(10YR7/3)	褐灰 (10YR6/1)	良好	波状口縁
6	T−2	深鉢	口縁部	風化著しい	ナデ				0.5mm〜2mmの茶褐色、灰色、灰黄色、黒色で光る透明で光る砂粒を含む	にぶい赤褐(2.5YR5/4)	にぶい赤褐(2.5YR5/4)	良好	
7	SD10	深鉢	口縁部	貝殻条痕の後、ナデ	ナデ 横方向の貝殻条痕		貝殻腹縁刺突文		透明で光る砂粒少量	明赤褐(5YR5/8)	にぶい褐(7.5YR7/4)	良好	
8	表採	深鉢	口縁部	ナデ	ナデ				透明で光る砂粒を多く、0.5mm以下の淡黄色の砂粒を含む	にぶい黄褐(10YR5/3)	褐灰 (10YR4/1)	良好	
9	SD9	深鉢	口縁部	ヨコナデ	ヨコナデ		一条の凹線		1mm以下の淡黄色の砂粒を含む	灰褐 (7.5YR4/2)	灰褐 (7.5YR4/2)	良好	外面にスス付着
10	T−12	深鉢	口縁部	磨き	磨き				0.5mm〜2mmの乳白色の粒、透明、黒色の光沢のある微細粒を含む	褐灰(7.5YR4/1)	にぶい褐(7.5YR5/4)	良好	外面にスス付着
11	T−6	深鉢	口縁部	口縁部…ナデ ヨコナデ	ナデ				1mm以下の乳白色、淡黄色の砂粒を含む	暗赤灰(2.5YR3/1)	暗赤灰(2.5YR3/1)	良好	
12	SD10	深鉢	口縁部	磨き	ナデ				0.5mm以下の透明で光る砂粒 1mm〜2mmの乳白色の砂粒を含む	暗褐(7.5YR3/4)	赤褐(5YR4/6)	良好	波状口縁
13	T−2	深鉢	口縁部	口縁部…ヨコナデ 胴部…ヘラナデ	ヨコナデ				2.5mm以下の乳白色、黒色で光る透明で光る金色に光る細かい砂粒を含む	灰褐(7.5YR4/2)	灰褐(7.5YR4/2)	良好	外面にスス付着
14	SD8	深鉢	口縁部	ナデ	ナデ				5.5mmの淡黄色の縁、2mm以下の淡黄色、灰白色、黒色で光る白色で光る砂粒を含む	にぶい赤褐(5YR4/3)	赤褐(5YR4/6)	良好	
15	T−14	深鉢	口縁部	口縁部…ナデ ヘラ磨き	ヘラ磨き				0.5mm〜1mmの光沢のある白色の粒を少量、透明、淡黄色の微細粒を多く含む	赤褐 (5YR4/6)	にぶい赤褐 (5YR5/4)	良好	
16	SD10	深鉢	口縁部	ヨコナデ	ヨコナデ				1mm〜2mmの淡黄色の砂粒を多く含む	にぶい赤褐(5YR4/3)	褐灰 (5YR4/1)	良好	
17	SD2	深鉢	口縁部	口縁部…ヨコナデ 斜方向のヘラナデ	ナデ				微砂〜1.5mmの灰色、淡黄色、透明で光る砂粒を含む	にぶい赤褐(5YR4/3)	明赤褐 (5YR5/8)	良好	
18	T−3	深鉢	口縁部	ナデ	ナデ				0.5mm〜2mmの灰色、淡黄色、黒色の粒 0.5mm〜1mmの透明の光沢のある粒を含む	にぶい橙(7.5YR6/4)	橙 (7.5YR6/6)	良好	
19	SD2	深鉢	口縁部	ナデ	ナデ				微砂〜2mmの茶褐色、淡黄色、灰白色、透明で光る砂粒を含む	にぶい赤褐(5YR4/4)	にぶい赤褐色(5YR4/4)	良好	
20	T−2	深鉢	胴部〜底部	磨き	磨き	ナデ			1mm〜2mmの灰色、淡黄色、黒色の砂粒を含む	にぶい褐(7.5YR5/4)	明褐 (7.5YR5/6)	良好	内面に炭化物付着
21	T−12	深鉢	頸部	磨き	ナデ				0.5mm〜1mmの乳白色の粒、透明の光沢のある微細粒、0.5mm〜1mmの黒色の粒を含む	灰褐 (7.5YR4/2)	橙 (7.5YR6/6)	良好	外面にスス付着
22	SD7	深鉢	頸部	磨き	磨き				透明で光る砂粒少量1mm〜2mmの褐色の砂粒を含む	黒褐 (5YR2/1)	赤褐 (5YR4/8) 黒褐 (5YR2/2)	良好	
23	T−1	浅鉢	口縁部〜胴部	磨き	斜方向の磨き		二条の沈線		1mm〜3mm程の白と5mm程の茶色の軟質の石粒、1mm程の光る透明の砂粒を含む	黒褐 (7.5YR3/2)	褐 (7.5YR4/3) 黒褐 (7.5YR3/1)	良好	

番号	トレンチ	器形	器部	器面調整			文様		胎土	色調		焼成	備考
				外面	内面	底面	外面	内面		外面	内面		
24	T−11	浅鉢	口縁部〜胴部	ナデ	ナデ				0.5mm〜1mmの淡黄色、茶褐色、黒色、乳白色の粒、透明、黒色の光沢のある微細粒	にぶい黄橙(10YR7/4) にぶい黄橙(10YR6/4)	にぶい黄橙(10YR7/4) 灰黄褐(10YR6/2)	良好	外面にスス付着 口径25.6cm
25	T−1	深鉢	口縁部	ヨコナデ	ヨコナデ		突帯		1.5mm以下の黒く光る砂粒、乳白色、透明の光る砂粒を含む	淡黄 (2.5Y8/3) 灰黄 (2.5Y6/2)	浅黄 (2.5Y7/3)	良好	
26	T−11	深鉢	口縁部	ヨコナデ	ヨコナデ		刻目突帯		1mm〜2mmの乳白色、灰色、半透明で光沢のある砂粒を含む	橙 (5YR6/6)	にぶい橙(7.5YR7/4)	良好	
27	T−2	深鉢	口縁部	ヨコナデ	ヨコナデ		刻目突帯		1mm以下の白色、透明で光る砂粒を含む	にぶい橙(5YR6/4)	にぶい橙(5YR7/3)	良好	
28	T−11	深鉢	口縁部	口縁部…ナデ ヨコナデ	横方向の磨き		幅広の刻突帯		0.5mm以下の褐色の砂粒を少量含む	灰黄褐 (10YR5/2)	灰黄褐 (10YR5/2)	良好	外面にスス付着
29	T−11	深鉢	口縁部	ヨコナデ	ヨコナデ		刻目突帯		0.5mm〜1mmの乳白色の砂粒を含む	灰黄 (2.5Y7/2)	淡黄 (2.5Y8/3)	良好	
30	T−8	深鉢	口縁部	ナデ	ナデ		一条の沈線		0.5mm〜2mmの淡黄色、0.5mm以下の光沢ある砂粒を含む	黒褐 (5YR3/1)	明赤褐 (5YR5/6)	良好	
31	T−9	深鉢	口縁部	口縁部…ヨコナデ 胴部…ヘラナデ	ヘラナデ		口縁部…斜方向の刻目突帯 胴部…斜方向の刻目突帯		2mm以下の白色、黒色の砂粒を含む	にぶい褐(7.5YR5/4)	にぶい褐(7.5YR6/3)	良好	
32	表採	深鉢	底部	ナデ	風化著しい	ナデ			2mm以下の茶色、灰色の砂粒を多く含む	にぶい赤褐(5YR5/3)	灰褐 (5YR4/2)	良好	底径5.9cm
33	T−8	深鉢	底部	ナデ	ナデ	ナデ			0.5mm〜1mmの乳白色の粒、透明黒色の光沢のある微細粒を含む	明褐 (7.5YR5/6)	橙 (7.5YR7/6)	良好	底径6cm
34	T−10	深鉢	底部	ナデ	ナデ	ナデ			3mm以下の灰色、白色の砂粒を含む	にぶい橙(7.5YR7/3)	褐灰 (7.5YR4/1)	良好	内面に炭化物付着 底径6.1cm
35	T−5	深鉢	底部	ナデ	ナデ	ナデ			1.5mm以下の白い砂粒と0.5mm以下の透明で光る砂粒を少量含む	にぶい橙(5YR6/3)	褐灰 (5YR4/1)	良好	底径5.9cm
36	SD6	深鉢	底部	ナデ	ナデ	ナデ			0.5mm〜1mmの淡黄色の砂粒を含む	灰褐 (5YR4/2)	にぶい黄橙(10YR6/4)	良好	
37	表採	深鉢	底部	風化著しい	ナデ	風化著しい			2mm以下の茶色、乳白色の砂粒を含む	明赤褐 (5YR5/3)	灰褐 (5YR5/2)	良好	内面にスス付着
38	T−6	深鉢	底部	縦方向のナデ	ナデ	ナデ			1mm〜2mmの白色、褐色の砂粒 3mm〜4mmの淡黄色の礫を含む	にぶい赤褐(5YR5/3)	赤褐 (5YR4/6)	良好	底径5.4cm
39	T−5	深鉢	底部	磨き	ナデ	ナデ			1mm以下の黒い棒状の光る砂粒 2.5mm以下の白い砂粒を含む	明赤褐 (5YR5/6)	褐 (7.5YR4/3)	良好	底径4.3cm
40	T−5	深鉢	底部	ナデ	ナデ	ナデ			1mm以下の黒い棒状の光る砂粒、透明の光る砂粒を極少量含む	にぶい橙(7.5YR6/4)	橙 (7.5YR6/6)	良好	底径3.0cm
41	T−2	深鉢	底部	ヨコナデ	ナデ	ナデ			1mm以下の淡黄色、白色、透明で光る砂粒を少々含む	橙 (7.5YR6/6)	にぶい黄褐(10YR4/3)	良好	
42	T−3	深鉢	底部	斜方向のハケ目後、ナデ	ナデ	ナデ			0.5mm以下の透明で光る砂粒、3mmの礫、1mm〜2mmの乳白色、灰色の砂粒を含む	橙 (7.5YR6/6)	灰褐 (7.5YR4/2)	良好	内面に炭化物付着
43	T−8	深鉢	底部	板状工具によるナデ	ナデ	ナデ			透明、黒色の光沢のある微細粒、1mm以下の乳白色の粒を含む	橙 (7.5YR6/6)	にぶい黄橙(10YR7/4)	良好	底径7.6cm
44	T−6	深鉢	底部						1mm大の黒色で光沢のある砂粒、0.5mm〜1mmの淡黄色の砂粒、4mmの灰色の礫を含む	にぶい黄橙(10YR7/3)	にぶい褐(7.5YR5/4)	良好	
45	T−5	深鉢	底部	ナデ	ナデ				3mm以下の褐色の砂粒、1mm以下の乳白色の砂粒を含む	にぶい橙(7.5YR7/4)	浅黄橙(10YR8/3)	良好	
46	T−13	深鉢	底部	ナデ	ナデ	ナデ			0.5mm〜3mmの灰色の粒、0.5mm〜2mmの茶褐色、黒色、乳白色の粒を含む	橙 (7.5YR7/6)	浅黄橙(10YR8/4) にぶい黄橙(10YR6/3)	良好	底径9.2cm



第8図　石器実測図（Ⅰ）



第9図　石器実測図（Ⅱ）

分欠如しており、長さ7.9cm＋α、幅9.8cm、厚み6.0cm、重さ710ｇである。頭部の敲打は著しい。

敲石Ｃは長さと幅の比が２：１で平面形と断面形は楕円形である。10は頭部をかなり敲打しており、長さ12.8cm、幅6.6cm、厚み3.8cm、重さ524ｇである。

３．扁平打製石斧（第８図11～13）

扁平打製石斧は石器全体の18.8％の３点が出土している。３点とも基端部幅と刃部幅がほぼ等しく、断面形が楕円形の短冊形のタイプである（11～13）。石材は11・12が安山岩、13が砂岩である。11は刃部が欠けており、長さ15.1cm、幅5.5cm、厚み2.3cm、重さ344ｇである。12は刃部と基端部を欠如しており、長さ9.2cm＋α、幅5.9cm、厚み1.3cm、重さ134ｇ＋αである。13は刃部を欠如しており、長さ11.1cm＋α、幅5.3cm、厚み1.8cm、重さが130ｇ＋αである。

４．磨製石斧　（第８図14）

磨製石斧は石器全体の 6.3％の１点が出土している。

石斧Ａは基端部と刃部幅がほぼ等しく、断面形が楕円形の薄手のタイプである（14）。14は基端部を欠如しており、長さ8.0cm＋α、幅5.6cm、厚み3.6cm、重さ356ｇ＋αである。石材は砂岩である。

５．石庖丁形石器　（第９図15・16）

石庖丁形石器は石器全体の12.5％の２点が出土している。

15は半分欠如しており、長さ6.6cm＋α、幅7.0cm、厚み1.5cm、重さ84ｇ＋αである。16も半分欠如しており、長さ7.0cm＋α、幅6.8cm、厚み1.3cm、重さ100ｇ＋αである。

第3表　朴木遺跡出土石器観察表

番号	グリッド	器種	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	石質	備考
1	表採	磨石	12.35+α	8+α	6.2	637	砂岩	敲石
2	T－5	磨石	6.6+α	9.3	4.5	314	安山岩	敲石
3	T－2	磨石	8.2+α	4.8+α	4.6	252+α	砂岩	敲石
4	T－5	磨石	5.3+α	3.8+α	3.0+α	68.0+α	安山岩	
5	表採	磨石	9.8	9.4	3.2	400	安山岩	敲石
6	T－6	磨石	15	10.1	6.2	1200	安山岩	
7	表採	磨石	12.35+α	8.4	3.9	600	砂岩	敲石
8	表採	敲石	14.9	8.95	5.0	866	安山岩	
9	T－5	敲石	7.9+α	9.8	6.0	710	安山岩	
10	T－5	敲石	12.8	6.55	3.8	524	砂岩	
11	表採	扁平打製石斧	15.1	5.5	2.3	344	安山岩	
12	T－2	扁平打製石斧	9.2	5.9	1.3	134	安山岩	
13	T－5	扁平打製石斧	11.1	5.3	1.8	130	安山岩	
14	T－2	磨製石斧	8.0+α	5.6+α	2.1+α	125+α	砂岩	
15	T－10	石庖丁形石器	7	6.25	1.45	84	砂岩	
16	SD11	石庖丁形石器	7.0+α	6.7	1.3	100	砂岩	

第4節　弥生時代中・後期の遺構と遺物

弥生時代中期末の石蓋土壙墓11基が検出された。そのうち1・5・10号石蓋土壙墓から弥生土器が出土している（第10図）。

（1）石蓋土壙墓

トレンチ調査の結果、11基の石蓋土壙墓が検出されたが、土壙墓は1基も検出されなかった。石蓋土壙墓はすべてほぼ東西方向を主軸としており、11号石蓋土壙墓を除くと通常の石蓋土壙墓と異なるのは墓壙を複数の石で蓋するのではなく、一枚で蓋しているが、完全に土壙を覆っていない。又土壙には二段掘りのものはなく、土壙の形態は長方形プランが7基、楕円形プラン4基である。なお、板石は地元ではヘゲ石と呼ばれ、石材は安山岩系である。

1号石蓋土壙墓　（第11図）

1号石蓋土壙墓はT－11に位置し、長さ120cm、幅50cm、深さ69cmの楕円形プランの土壙の上に99cm×61cmの一枚石で蓋しているが、土壙の足部が覆っていない。楕円形プランも頭部と推定される方が幅47cm、足部と推定される方が幅20cmである。床面全体から無茎磨製石鏃が20点出土したが、すべて使用済みの石鏃で、先端が折れたりしているものや破片もある。磨製石鏃の大多数は切っ先を足先に向けている。また甕の底部が1点（第13図1）出土している。

2号石蓋土壙墓　（第11図）

2号石蓋土壙墓はT－9に位置し、長さ137cm、幅52cm、深さ73cmの長方形プランの土壙の上に141cm×71cmの一枚石で蓋しているが、蓋石がずれており、完全に土壙を覆っていない。

3号石蓋土壙墓　（第11図）

3号石蓋土壙墓はT－3に位置し、長さ138cm、幅59cm、深さ67cmの長方形プランの土壙の上に112cm×95cmの一枚石で蓋しているが、完全に土壙を覆っていない。

4号石蓋土壙墓　（第11図）

4号石蓋土壙墓はT－1に位置し、現存の長さ82cm、幅66cm、深さ78cmの長方形プランの土壙の上に102cm×65cmの一枚石で蓋している。

5号石蓋土壙墓　（第11図）

5号石蓋土壙墓はT－10に位置し、長さ138cm、幅63cm、深さ66cmの長方形プランの土壙の上に120cm×111cmの一枚石で蓋しているが、完全に土壙を覆っていない。長方形透かしを有する高坏の脚部片（第13図2）が出土している。

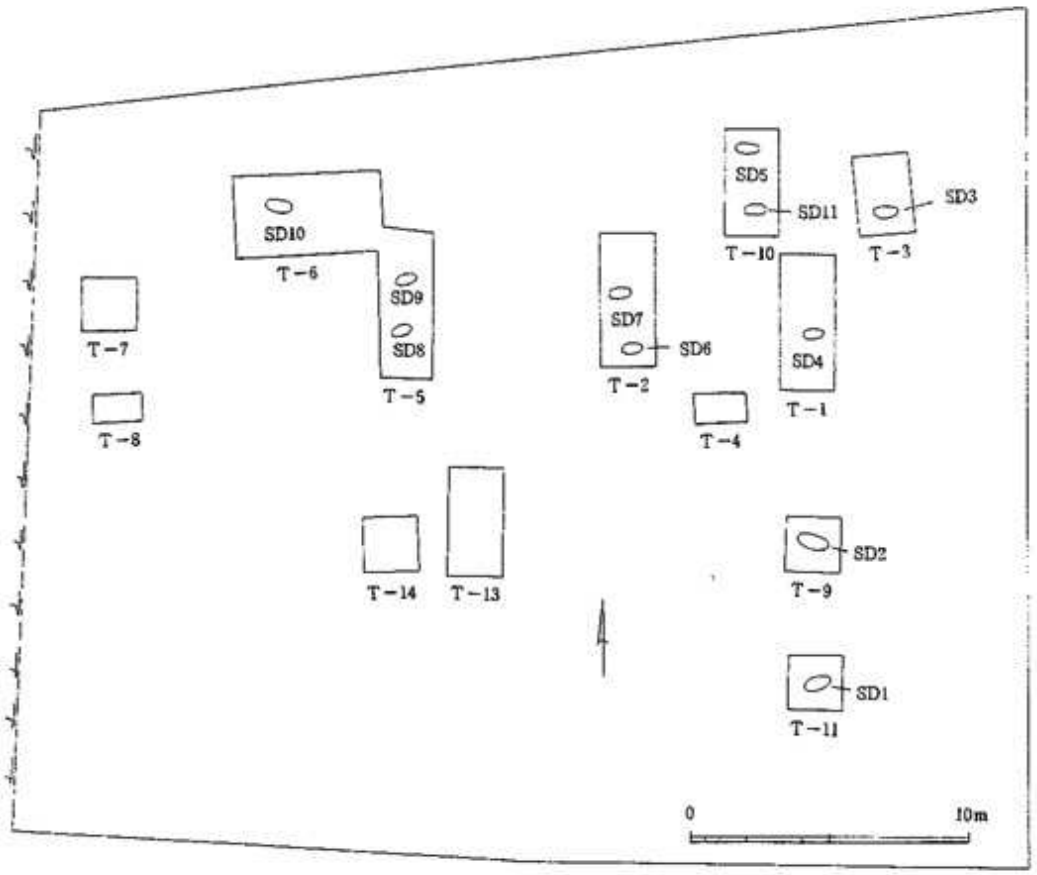
6号石蓋土壙墓　（第11図）

6号石蓋土壙墓はT－2に位置し、長さ93cm、幅64cm、深さ45cmの長さの短い長方形プランの土壙の上に88cm×68cmの一枚石で蓋しているが、蓋石がずれており、完全に土壙を覆っていない。

7号石蓋土壙墓　（第11図）

7号石蓋土壙墓はT－2に位置し、長さ145cm、幅60cm、深さ61cmの長方形プランの土壙の上に94cm×88cmの一枚石で蓋しているが、完全に土壙を覆っていない。

8号石蓋土壙墓　（第11図）



ＳＤ … 石蓋土壙墓

第10図　弥生時代遺構分布図

8号石蓋土壙墓はＴ－５に位置し、長さ136cm、幅51cm、深さ81cmの長方形プランの土壙の上に85cm×51cmの一枚石で蓋しているが、完全に土壙を覆っていない。

9号石蓋土壙墓　（第12図）

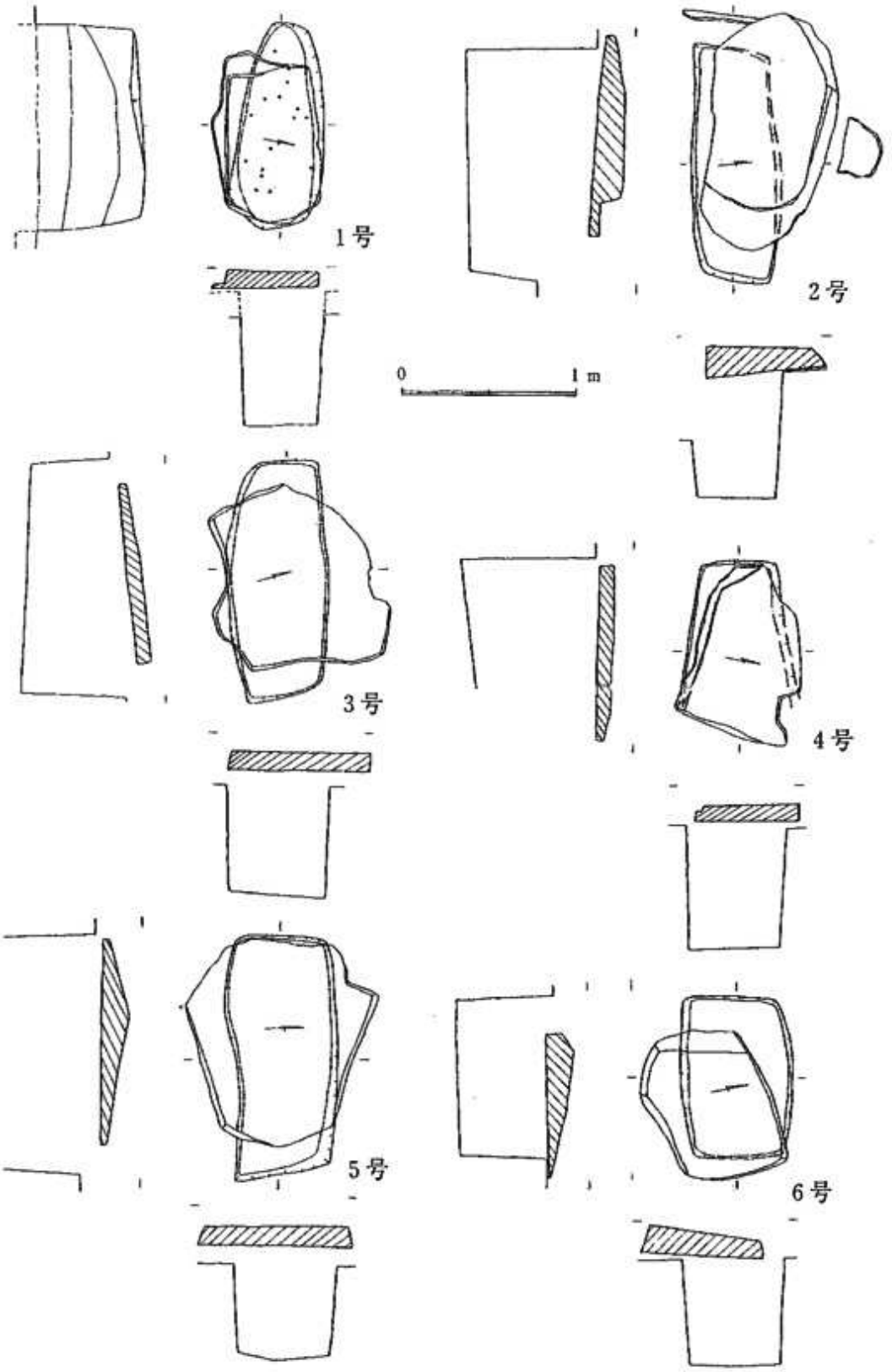
9号石蓋土壙墓はＴ－５に位置し、長さ109cm、幅50cm、深さ73cmの楕円形プランの土壙の上に71cm×50cmの一枚石で蓋しているが、完全に土壙を覆っていない。

10号石蓋土壙墓　（第12図）

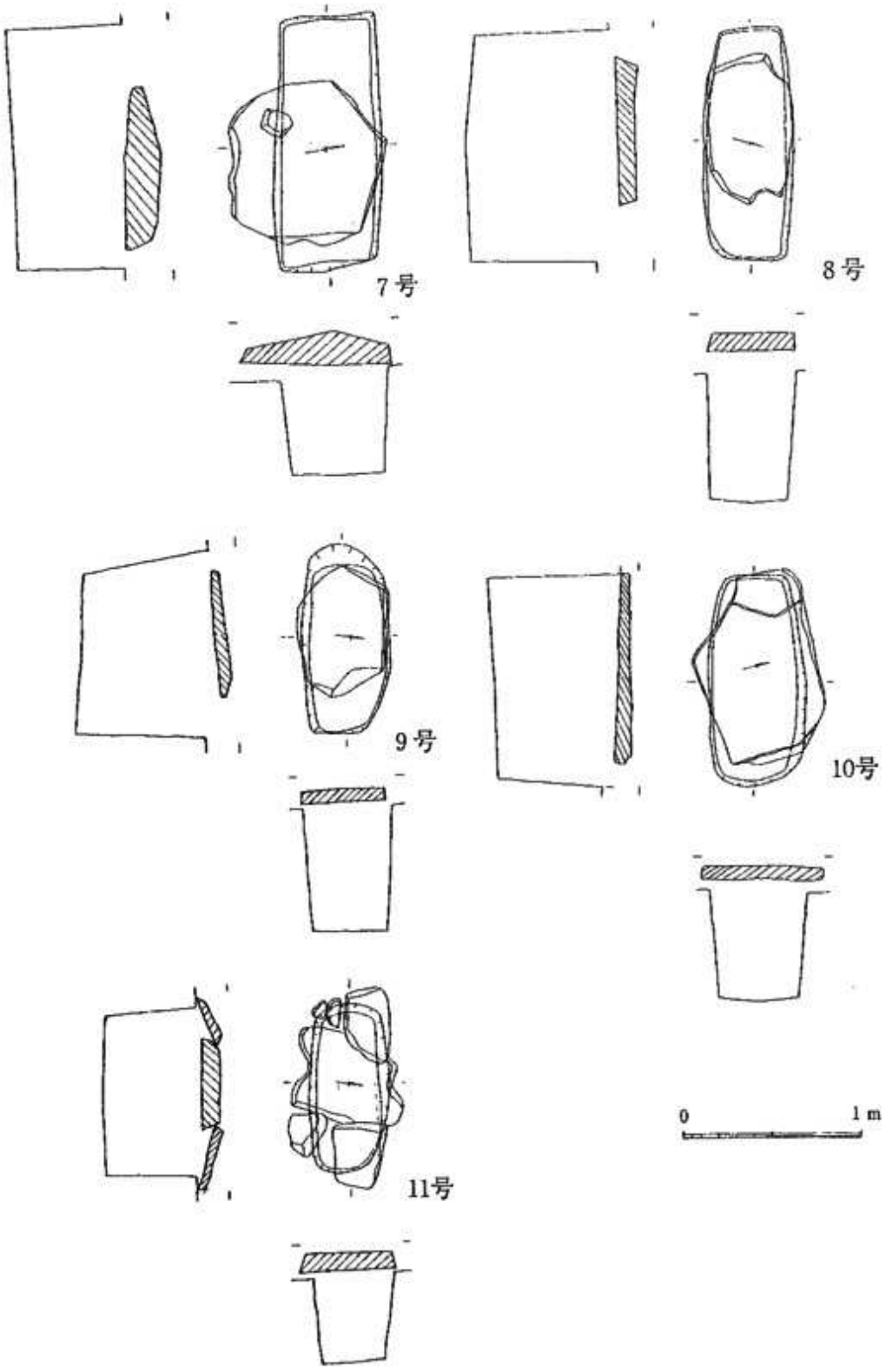
10号石蓋土壙墓はＴ－６に位置し、長さ121cm、幅55cm、深さ71cmの楕円形プランの土壙の上に107cm×61cmの一枚石で蓋している。甕の底部（第13図３）が出土している。

11号石蓋土壙墓　（第12図）

11号石蓋土壙墓はＴ－10に位置し、長さ97cm、幅45cm、深さ53cmの楕円形プランの土壙の上に複数の石で蓋しており、土壙をほぼ完全に覆っている。



第11図　石蓋土壙墓実測図（Ⅰ）



第12図　石蓋土壙墓実測図（Ⅱ）

第4表　石蓋土壙墓計測表

番号	トレンチ	方位	長さ cm	幅 cm	深さ cm	蓋石数	出土遺物	備考
SD1	T－11	E－11° －N	120	50	69	1	磨製石鏃・甕	
SD2	T－9	E－6° －N	137	52	73	1		
SD3	T－3	E－16° －S	138	59	67	1		
SD4	T－1	E－11° －S	82＋α	66	78	1		半分だけ調査
SD5	T－10	E－0° －N	138	63	66	1	高坏	
SD6	T－2	E－10° －S	93	64	45	1		
SD7	T－2	E－10° －S	145	60	61	1		
SD8	T－5	E－19° －N	136	51	81	1		
SD9	T－5	E－9° －N	109	50	73	1		
SD10	T－6	E－14° －S	121	55	71	1	甕	
SD11	T－10	E－9° －N	97	45	53			

（2）弥生土器

当遺跡の石蓋土壙墓・トレンチから出土した土器について次のように分類される。

壺

壺　（第13図4～28）

Ⅰ類　口縁部が斜め上方に伸び、口縁部直下に1条の突帯を巡らしている。外面は縦方向のヘラ磨きを、内面はヨコナデを施している（4）。

Ⅱ類　頸部はほぼ直立し、口縁部が水平に外反する鋤先口縁部の壺である。口唇部はヨコナデで凹気味に仕上げ、内側に張り出している（5～8）。

胴部の最大径に断面三角形の3条の突帯を巡らすタイプ（10・11）と断面M字形の1条突帯を巡らすタイプ（12）、断面台形の1条突帯を巡らすタイプ（13）である。

Ⅲ類　頸部はほぼ直立し、口縁部が斜めに上方に大きく伸びる大型の壺である（16～20）。

Ⅳ類　頸部はほぼ直立し、口縁部がわずかに外反する（21～25）。

Ⅴ類　頸部に断面三角形の突帯を一条巡らす（26・27）。

無頸壺　（第13図29）

Ⅰ類　胴部がほぼ直立して伸び、口縁部が短く水平に伸びる。胴部の外面は縦方向のハケメを、内面はナデを施している。

底部　（第13図30、第14図31～36）

底部はすべて平底であるが、一旦すぼまってから斜め上方に立ち上がるもの（30～34）と丸味を持ちながら立ち上がるもの（35・36）に分かれる。

甕　（第14図37～67）

甕は法量から大型（口径21～30cm、器高30～33cm）、中型（口径15～21cm、器高17～28cm）、小型（口径12～15cm、器高14～17cm）とする。

Ⅰ類　口径が胴部の最大径よりわずかに大きく、胴部の最大径は口縁部直下の断面台形の突帯の位置にある。口縁部は水平より若干垂れ下がり気味の逆L字形に外反し、口縁部の断面は三角形である。突帯の上下は沈線を施しており、突帯は一条しか現存していないが、複数と推定される。口縁部の上面には浮文があるが、上部を欠如しているの

で形態は不明である。内外面ともヨコナデとナデを施している（37）。大型である。

Ⅱ類　口径が胴部の最大径よりわずかに大きく、胴部の最大径は口縁部直下にある。口縁部はほぼ水平の逆Ｌ字形に外反し、口縁部の断面は長台形である。口縁部直下には断面三角形の一条突帯を有している（38）。中型である。

Ⅲ類　口径が胴部の最大径よりわずかに大きく、胴部の最大径は口縁部直下にある。口縁部はほぼ水平の逆Ｌ字形に外反し、口縁部の断面は長方形状である。口縁部直下には一条の沈線を有している（40）。中型である。

Ⅳ類　口径が胴部の最大径よりわずかに大きく、胴部の最大径は口縁部直下にある。口縁部は水平より斜め上方にわずかに上がり気味の逆Ｌ字形に外反し、内側に小さく突出している（42～47）。口縁部の断面の形態には長方形と長台形がある。38は胴部の内外面ともハケメを施している。中型である。

Ⅴ類　口径が胴部の最大径よりわずかに大きく、胴部の最大径は口縁部直下にある。口縁部は水平より斜め上方にわずかに上がり気味の逆Ｌ字形に外反し、Ⅳ類に見られる内側の小さな突出はない。口縁部の断面の形態には長方形と長台形がある（48～53）。中型である。

Ⅵ類　口径が胴部の最大径より大きく、胴部の最大径は口縁部直下にある。口縁部は内傾に内湾しながら跳ね上がり、内側の突出が著しい。口唇部は丸く仕上げている。（54・55）。

Ⅶ類　口径が胴部の最大径よりわずかに大きく、胴部の最大径は口縁部直下にある。口縁部はくの字に短く外反し、内側に段を有する（56～58）。56は表面から穿孔しているが、貫通していない。

Ⅷ類　口径が胴部の最大径より大きい。口縁部は斜め上方に伸び、途中から大きく外反する（63～66）。

底部　充実した脚台の39と上げ底で若干すぼまり途中から斜め上方に立ち上がる67がある。39はⅠ類かⅡ類の底部と推定される。

高坏　（第13図２、第14図68）

Ⅰ類　坏部の上半部が丸みを持ち、口縁部が水平に伸びる断面鋤形の平坦な口縁部である。口唇部は凹気味に仕上げ、内側に張り出している。内外面は風化著しいが、ヘラ磨きを施していたと推定される（68）。

Ⅱ類　脚端部が短く外反し、脚部には一条の沈線の下位に長方形の透かしを有する（２）。

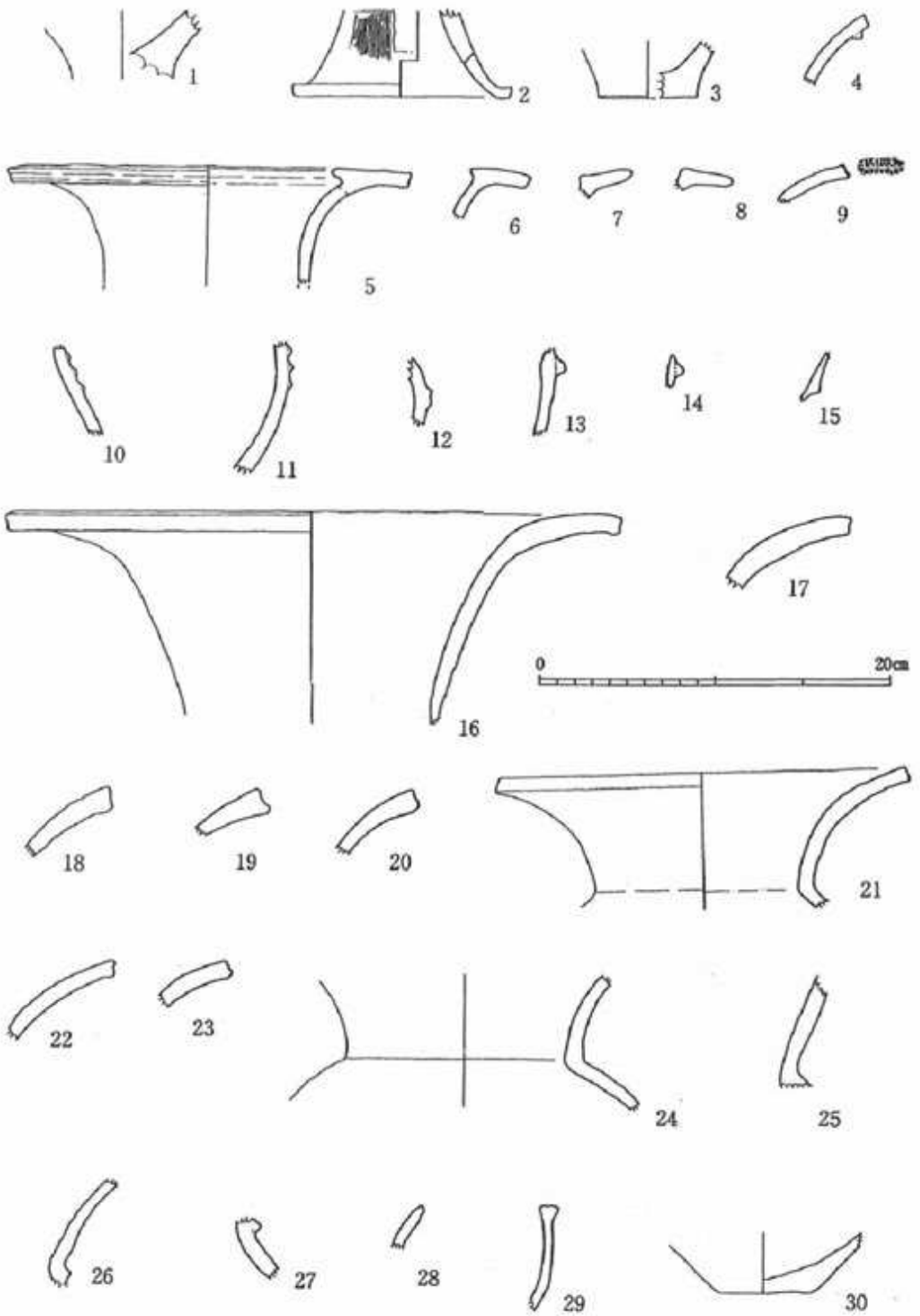
（３）石　器

弥生時代の石器としては１号石蓋土壙墓から出土した20点の磨製石鏃のみである。

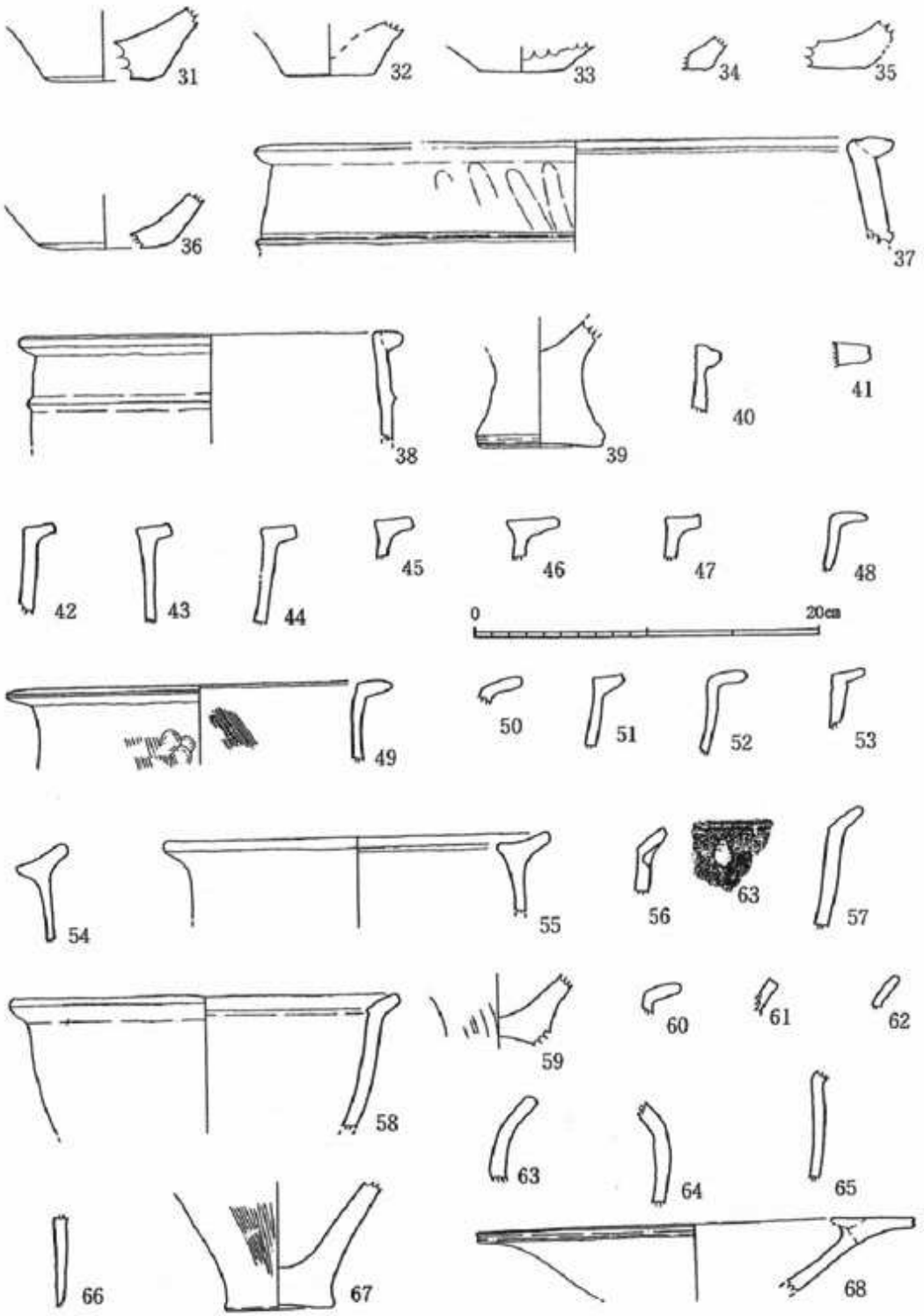
磨製石鏃　（第15図１～20）

１号石蓋土壙墓から出土した磨製石鏃はすべて無茎鏃で、すべて使用済で、未製品は含まれていない。法量は長さ2.6cm～3.6cm、幅1.3cm～2.0cm、長さ0.2cm～0.3cm、重さ0.8ｇ～2.6ｇである。石材はすべて頁岩であるが、色は灰オリーブ色（7.5Y　6／2）が14点（1・2・4・6・7・9・11・13～15・17～20）、灰赤色（7.5R　4／2）が４点（3・5・8・10）、灰色（N　6／）が２点（12・16）である。

磨製石鏃の形態は基本的には２長辺の外湾する三角形で、基端部は主要面に直交して研磨


1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
0
20cm
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30

第13図　弥生土器（Ⅰ）


31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
43
44
45
46
47
48
0
20cm
49
50
51
52
53
54
55
56
63
57
58
59
60
61
62
63
64
65
66
67
68

第14図　弥生土器（Ⅱ）

第5表　弥生土器観察表

番号	トレンチ	器形	器部	器面調整			胎土	色調		焼成	備考
				外面	内面	底面		外面	内面		
1	SD1	甕	底部	縦方向のナデ	ナデ		黒色で光る、透明で光る砂粒、0.5㎜～1㎜の乳白色、灰色の砂粒を含む	褐灰（5YR5／1）	黒褐（5YR3／1）	良好	
2	SD5	高坏	脚部	縦方向のハケ目 ナデ	ナデ		1㎜～2㎜の乳白色の砂粒を少量含む	にぶい褐（7.5YR5／4）	橙（7.5YR6／6）	良好	長方形の透し 底径12.2cm
3	SD10	甕	底部	ナデ	ナデ	ナデ	2㎜～5㎜の赤褐色の礫、0.5㎜～1㎜の灰色、乳白色、褐色の砂粒を含む	にぶい黄橙（10YR7／3） にぶい赤褐（2.5YR5／3）	にぶい黄橙（10YR7／3）	良好	底径5.8cm
4	T－11	壺	口縁部	ヨコナデ 縦方向の磨き	磨き		1.5㎜～2.5㎜の乳白色の石粒を少量と1㎜以下の金色に光る石粒を多量に含む	にぶい褐（7.5YR5／4）	にぶい橙（7.5YR6／4）	良好	突帯
5	T－11	壺	口縁部	ナデ	ナデ		0.5㎜～2㎜の茶色、乳白色、灰色の砂粒を多く含む	浅黄橙（10YR8／4）	浅黄橙（10YR8／4）	良好	口径23.1cm
6	T－10	壺	口縁部	ナデ	ヨコナデ		3㎜以下の茶色、灰色の砂粒を含む	にぶい橙（7.5YR7／4）	にぶい橙（7.5YR7／4）	良好	
7	T－11	壺	口縁部	ヨコナデ	ヨコナデ		0.5㎜～1㎜の黒色、灰色、褐色の砂粒、2㎜～3㎜の赤褐色、灰色の礫を含む	にぶい黄橙（10YR7／4）	にぶい黄橙（10YR7／4）	良好	
8	T－11	壺	口縁部	ヨコナデ	ヨコナデ		0.5㎜～1㎜の褐色、黒色の砂粒、黒色で光る砂粒を含む	にぶい黄橙（10YR7／4）	にぶい黄橙（10YR7／4）	良好	
9	T－10	壺	口縁部	ナデ	ナデ		2㎜以下の灰色と茶色の砂粒を少し含む	浅黄橙（10YR8／3）	淡黄（2.5Y8／4）	良好	口縁部に一条の沈線上下に刻目
10	T－1	壺	頸部	ヨコナデ 縦方向の磨き	磨き		2㎜以下の金色の光る砂粒、1㎜～5㎜の白、乳白色の砂粒を含む	にぶい褐（7.5YR5／3）	橙（7.5YR6／6）	良好	三条の突帯
11	T－11	壺	胴部	ヨコナデ・磨き	横方向の磨き		3㎜以下の金色に光る砂粒を多く、2.5㎜以下の茶、乳白色の石粒を少量含む	黒（10YR2／1）	にぶい橙（7.5YR7／4）	良好	三条の突帯
12	T－7	壺	胴部	ヨコナデ	ナデ		1㎜以下の茶色、灰色と無色で光る砂粒を含む	にぶい橙（7.5YR6／4）	にぶい橙（7.5YR7／3）	良好	
13	T－14	壺	胴部	ナデ	風化著しい		0.5㎜～3㎜の茶色、灰色、乳白色、黒色の砂粒を含む	にぶい黄橙（10YR6／3）	浅黄橙（10YR8／4）	良好	
14	T－1	壺	胴部	ヨコナデ	剥離		1㎜以下の白い軟質の砂粒を少量含む	にぶい黄褐（10YR5／3）	浅黄橙（10YR8／4）	良好	突帯
15	T－11	壺	胴部	ナデ	ナデ		1㎜以下の褐色、灰色の砂粒を多く含む	浅黄橙（10YR8／4）	にぶい黄橙（10YR6／4）	良好	
16	T－7	壺	口縁部	ナデ	ナデ		2㎜以下の乳白色と茶色の砂粒を多く含む	橙（7.5YR7／6）	橙（7.5YR7／6）	良好	口径35.2cm
17	T－7	壺	口縁部	口唇部…ナデ 胴部…ナデ	ナデ		1㎜以下の黒色の細粒を少量含む	橙（5YR7／6）	橙（5YR7／6）	良好	外面に一部スス付着 内面に一部炭化物付着
18	T－3	壺	口縁部	口唇部…ヨコナデ 胴部…ヨコナデ	ナデ		1㎜以下の黒、灰色、褐色の砂粒を含む	淡黄（2.5Y8／3）	浅黄橙（10YR8／3）	良好	
19	T－6	壺	口縁部	口唇部…ヨコナデ 胴部…ヨコナデ	ナデ		1㎜以下の灰色、褐色の砂粒を多く透明で光る砂粒を少量含む	淡黄（2.5Y8／3）	浅黄橙（10YR8／3）	良好	
20	T－14	壺	口縁部	口唇部…ヨコナデ 胴部…ヨコナデ・ナデ	ヨコナデ・ナデ		淡黄色、黒色の微細粒、黒色、透明の光沢のある微細粒を含む	にぶい黄橙（10YR7／4）	にぶい黄橙（10YR7／4）	良好	
21		壺	口縁部	風化著しい	ナデ		3㎜以下の茶色、褐色の砂粒を少し含む	黄橙（10YR8／6）	橙（7.5YR7／6）	良好	口径23.25cm
22	T－9	壺	口縁部	全体的に風化著しい為不明	全体的に風化著しい為不明		2㎜以下の乳白色の砂粒を少し含む	橙（5YR7／8）	橙（5YR7／8）	良好	
23	T－14	壺	口縁部	ナデ	ナデ		0.5㎜～2㎜の茶色、灰色、黒色の砂粒 0.5㎜以下の黒色、茶色の光沢粒を含む	浅黄橙（10YR8／4）	浅黄橙（7.5YR8／4） 灰白（10YR8／2）	良好	

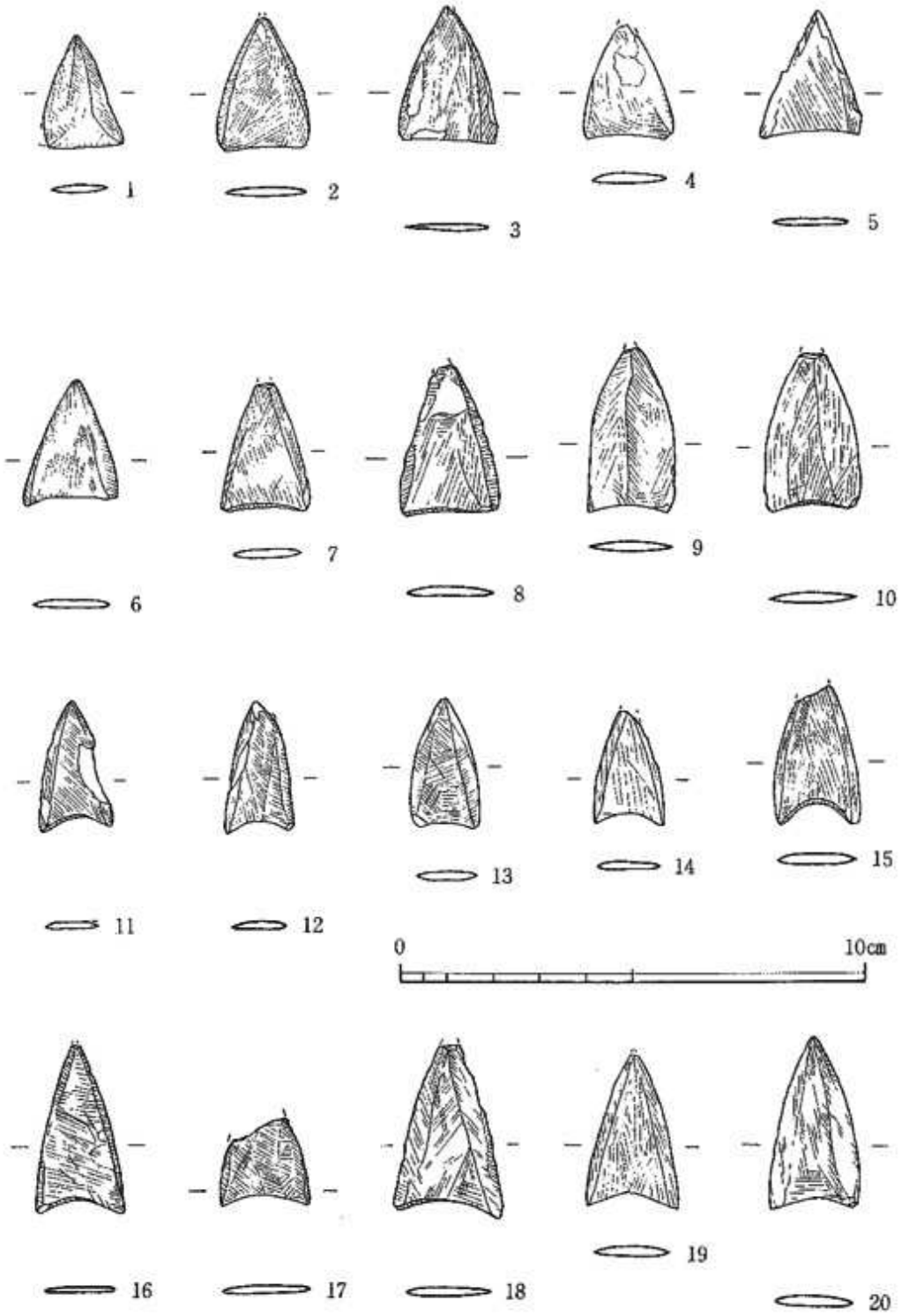
番号	トレンチ	器形	器部	器面調整			胎土	色調		焼成	備考
				外面	内面	底面		外面	内面		
24	T−9	壺	口縁部	全体的に風化著しい為不明	全体的に風化著しい為不明		4mm以下の茶色、黒色の砂粒を多く、無色で光る砂粒を少し含む	浅黄橙（10YR8/4）	浅黄橙（10YR8/4）	良好	
25	T−7	壺	頸部	ヨコナデ・風化気味	ていねいなヨコナデ		1mm以下の灰色、白色の砂粒と無色で輝く細砂粒を含む	にぶい橙（7.5YR7/6）	にぶい橙（7.5YR7/4）	良好	内面に炭化物付着
26	T−10	壺	頸部	風化著しい	風化著しい		2mm以下の白色、灰色、褐色の砂粒を多く含む	浅黄橙（10YR8/4）	浅黄橙（10YR8/3）	良好	
27	表採	壺	頸部	ヨコナデ・ナデ	ナデ・ヨコナデ		1mm以下の淡黄色の砂粒を含む	浅黄橙（10YR8/3）	褐灰（10YR5/1）	良好	
28	T−2	壺	頸部	ナデ	ナデ		0.5mm～2mmの灰色、茶褐色の粒、透明、黒色の光沢のある微細粒を含む	浅黄橙（10YR8/3）	浅黄橙（10YR8/3）	良好	
29	T−10	壺	頸部	口縁部…ナデ 胴部…縦・斜方向のハケ目	ていねいなナデ		5mm位の白色の粒を少量含む	橙（7.5YR6/6）	にぶい褐（7.5YR6/3）	良好	
30	T−2	壺	底部	ナデ	ナデ	ナデ	1mm以下の茶色、灰色、褐色、透明で光る砂粒を多く含む	にぶい黄橙（10YR6/3）	明灰黄（2.5YR5/2）	良好	底径5.3cm
31	表採	壺	底部	ナデ	風化著しい	ナデ	3mm以下の茶色、褐色の砂粒を多く含む	浅黄橙（10YR8/4）	淡黄（2.5Y8/4）	良好	底径6.9cm
32	表採	壺	底部	ナデ	ナデ	ナデ	0.5mm～1mmの茶色、黒色、灰色の粒、黒色の微細粒を多量に含む	浅黄橙（10YR8/4）	淡黄（2.5Y8/3） 灰黄（2.5Y7/2）	良好	底径5.2cm
33	T−10	壺	底部	ナデ	剥離	ナデ	1mm以下の黒色、灰色の砂粒を含む	にぶい黄橙（10YR7/4）	橙（5YR7/6）	良好	底径5cm
34	T−2	壺	底部	ナデ	ナデ	ナデ	0.5mm～2mmの灰色、淡黄色、透明で光る砂粒を含む	にぶい黄橙（10YR7/4）	灰黄褐（10YR4/2）	良好	
35	T−6	壺	底部	ナデ	ナデ	ナデ	0.5mm～1mmの褐色、淡黄色の砂粒を含む	橙（5YR6/6）	灰褐（7.5YR4/2）	良好	
36	T−14	壺	底部	ナデ	ナデ	ナデ	0.5mm～1mmの茶色、黒色、灰色の砂粒を多量、透明、黒色の光沢のある微細粒を含む	淡黄（2.5Y8/4）	淡黄（2.5Y8/3）	良好	底径8cm
37	T−9	甕	口縁部	ていねいなヨコナデ 胴部指押さえ	ていねいなヨコナデ		微砂～2mmの茶褐色、白色、灰白色、黄色、透明で光る、黒色で光る砂粒を含む	橙（7.5YR6/6）	橙（5YR6/6）	良好	沈線・突帯 口径37.1cm
38	T−10	甕	口縁部	口縁部…ナデ 胴部…横方向のナデ	斜方向のナデ		1mm以下の灰色、乳白色、褐色、透明で光る、黒色で光る砂粒を含む	にぶい褐（7.5YR6/3）	にぶい橙（7.5YR7/4）	良好	突帯・外面にスス付着 口径2.2cm
39	T−10	甕	口縁部	ナデ	ナデ	ナデ	2mm以下の乳白色、灰色、黒色、金色で光る、黒色で光る砂粒を多く含む	橙（7.5YR7/6）	橙（7.5YR7/6）	良好	底径7.3cm
40	表採	甕	口縁部	ナデ	ナデ		0.5mm～1mmの茶色、黒色、淡黄色の粒、透明、茶褐色の光沢のある微細粒を含む	浅黄橙（10YR8/4） にぶい黄橙（10YR7/4）	にぶい橙（7.5YR7/4）	良好	沈線
41	T−2	甕	口縁部	ヨコナデ	ヨコナデ		微砂～3mmの淡黄色、褐色、白色、金色、透明で光る砂粒を含む	明黄褐	明黄褐	良好	口縁部に一条沈線
42	T−6	甕	口縁部	口縁部…ナデ 胴部…ヨコナデ	ヨコナデ		0.5mm～1mmで灰、黒、白色の砂粒を多量に含む	橙（5YR6/6）	にぶい黄橙（10YR7/3）	良好	
43	T−2	甕	口縁部	口縁部…ヨコナデ 胴部…ナデ	ナデ		3mm以下の茶褐色、灰色、白色の砂粒、2mm以下の黒色で光る、乳白色で光る透明で光る粒を多く含む	橙（7.5YR7/6）	にぶい黄橙（10YR7/4）	良好	外面にスス付着
44	T−1	甕	口縁部	口縁部…ヨコナデ 胴部…縦方向のハケ目	ヨコナデ		1mm以下の黒く角状に光る粒、透明で光る粒、茶色の砂粒を多量に含む	橙（7.5YR7/6）	橙（7.5YR7/6）	良好	
45	T−2	甕	口縁部	ナデ	ナデ		1mm以下の灰色、黒色で光る透明で光る細かい砂粒を含む	橙（7.5YR7/6）	橙（7.5YR7/6）	良好	
46	T−2	甕	口縁部	ナデ	ナデ		0.5mm～3mm以下の茶褐色、黒色、灰白色、浅黄橙色、透明で光る砂粒を多く含む	にぶい黄橙（10YR7/4）	にぶい黄橙（10YR7/3） 褐灰（10YR5/1）	良好	

番号	トレンチ	器形	器部	器面調整			文様	色調		焼成	備考
				外面	内面	底面		外面	内面		
47	T−10	甕	口縁部	口縁部…ナデ 胴部…ヨコナデ・ナデ	ナデ		3mm以下の茶色、黒色の砂粒を含む	にぶい橙（5YR6／3）	橙（7.5YR7／6）	良好	
48	T−6	甕	口縁部	ヨコナデ	ヨコナデ		1mm〜2mmの灰色、褐色、5mmの礫を含む 0.5mm以下の細砂粒を多く含む	浅黄橙（10YR8／3） 灰黄褐（10YR5／2）	にぶい黄橙（10YR7／4）	良好	
49	T−7	甕	口縁部	口縁部…ナデ 胴部…斜方向のハケ目 一部指押さえ	ナデ わずかにハケ目の痕残る		2mm以下の灰色、白く輝く黒く輝く砂粒を含む	灰褐（7.5YR6／2）	明褐灰（7.5YR7／2）	良好	口径22.2cm
50	T−1	甕	口縁部	ヨコナデ	ヨコナデ		1mm以下の茶色の砂粒を多く含む	橙（7.5YR7／6）	橙（7.5YR7／6）	良好	
51	T−6	甕	口縁部	口縁部…横方向のハケ目・ナデ 胴部…縦方向のハケ目・ナデ	横斜方向のハケ目 ナデ		半透明で光る、1mm以下の褐色、乳白色の砂粒をを含む	にぶい橙（5YR7／4）	にぶい黄橙（10YR7／4）	良好	外面に一部スス付着
52	T−2	甕	口縁部	口縁部…ナデ 胴部…ナデ	ナデ		2mm以下の淡黄色、白色、茶色の砂粒、1.5mm以下の棒状で黒色に光る透明で光る粒を含む	灰黄褐（10YR6／2）	灰黄褐（10YR5／2）	良好	
53	T−6	甕	口縁部	口縁部…ナデ 胴部…ナデ	ナデ		0.5mm〜1mmの半透明、黒色で光沢のある砂粒、1mm以下の褐色、黒色の砂粒を含む	にぶい黄（2.5Y6／3）	浅黄（2.5Y7／3）	良好	外面に沈線文
54	T−2	甕	口縁部	ヨコナデ	ヨコナデ		0.5mm〜2mmの白色、茶色、透明で光る棒状で黒色で光る砂粒を含む	淡黄（2.5Y8／3）	淡黄（2.5Y8／3） 浅黄（2.5Y7／3）	良好	外面にスス付着
55	T−9	甕	口縁部	ヨコナデ	ヨコナデ		2mm以下の茶色、灰白色、透明で光る砂粒を多く含む	にぶい黄橙（10YR7／3）	浅黄橙（7.5YR8／3）	良好	口径22cm
56	T−10	甕	口縁部	ナデ	ナデ		2mm以下の灰色、黒色の砂粒を多く含む	黄灰（2.5Y4／1）	浅黄橙（10YR8／4）	良好	穿孔
57	T−10	甕	口縁部	ナデ	ナデ		1mm以下の乳白色、黒色の砂粒と無色で光る砂粒を含む	浅黄橙（10YR8／4）	にぶい橙（7.5YR7／4）	良好	
58	T−3	甕	口縁部	ヨコナデ 斜方向のナデ	ヨコナデ		2mm以下の灰色、黒色、白色、透明で光る、黒色で光る砂粒を含む	浅黄橙（7.5YR8／6）	にぶい橙（5YR7／4）	良好	口径22.2cm 外面にスス付着
59	T−4	甕	口縁部	縦方向のナデ	ナデ		1.5mm以下の白、灰色の砂粒を多量に透明の光る砂粒を少量含む	にぶい黄橙（10YR7／4）	暗灰黄（2.5Y5／2）	良好	
60	T−1	甕	口縁部	ヨコナデ	ヨコナデ		1mm以下の透明で光る粒、黒く光る粒、白、茶色の砂粒を多く含む	にぶい黄橙（10YR7／3）	灰黄褐（10YR4／2）	良好	
61	T−11	甕	口縁部	ナデ	ナデ		1mm以下の灰色、褐色の砂粒を含む	浅黄橙（10YR8／3）	浅黄橙（10YR8／4）	良好	
62	T−11	甕	口縁部	ヨコナデ	ヨコナデ		0.5mm以下の淡黄色、褐色の砂粒、透明で光る砂粒を含む	褐（10YR4／6） 黒褐（10YR3／1）	明黄褐（10YR7／6） 灰黄褐（10YR4／2）	良好	
63	T−4	甕	口縁部	ヨコナデ	ヨコナデ		黒、透明の光る微細粒を少量含む	にぶい黄橙（10YR7／4） 橙（5YR7／6）…口縁部分	にぶい赤褐（5YR5／3） にぶい黄橙（10YR7／4）	良好	
64	表採	甕	口縁部	風化著しい	ナデ		2mm以下の褐色と黒色で光る砂粒を含む	浅黄橙（7.5YR8／4）	橙（7.5YR7／6）	良好	
65	T−3	甕	頸部	ヨコナデ 縦平行叩き	ヨコナデ 斜方向のナデ		透明で光る砂粒少量、1mm〜2mmの褐色、赤褐色の砂粒を含む	灰黄（2.5Y6／2）	浅黄（2.5Y7／3）	良好	内面に炭化物付着
66	T−10	甕	頸部	ヨコナデ 縦方向のハケ目	ナデ		3mm以下の褐色と無色で光る砂粒を含む	淡黄（2.5Y8／3）	淡黄（2.5Y8／3）	良好	
67	T−10	甕	頸部	縦方向のハケ目	ナデ	ナデ	0.5mm〜1mmの淡黄色、乳白色、灰色の粒、茶褐色、透明、黒色の光沢のある微細粒を含む	にぶい黄橙（10YR7／3） にぶい黄橙（10YR7／4）	灰黄褐（10YR6／2）	良好	底径6cm
68	T−2	高坏	口縁部	ナデ	ナデ		金色で光る、黒色で光る微細粒を少し含む	にぶい橙（5YR7／4）	橙（5YR7／6）	良好	口径21.5cm

され縁面を形成して内湾している。Ⅰ類は基端部が外湾するタイプの1のみである。Ⅱ類は基端部が内湾するタイプで2～8の正三角形に近いグループ、9・10の柳葉形に近いグループ、11～14の細身のグループ、基端部の内湾の著しい15のグループ、16～20の長三角形のグループに分かれる。特に19・20は基端部の内湾が直線的である。

第6表　磨製石鏃計測表

番号	遺構	器種	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	石質	備考
1	SD1	磨製石鏃	2.5+α	1.3	0.2	0.8	頁岩	灰オリーブ (7.5Y6/2)
2	SD1	磨製石鏃	2.8+α	1.8	0.2	1.55	頁岩	灰オリーブ
3	SD1	磨製石鏃	2.95+α	1.4	0.2	1.50	頁岩	灰赤 (7.5R4/2)
4	SD1	磨製石鏃	2.4+α	1.7	0.25	1.30	頁岩	灰オリーブ
5	SD1	磨製石鏃	2.65	1.8	0.2	1.30	頁岩	灰赤
6	SD1	磨製石鏃	2.6+α	1.8	0.2	1.10	頁岩	灰オリーブ
7	SD1	磨製石鏃	2.7+α	1.5	0.2	1.25	頁岩	灰オリーブ
8	SD1	磨製石鏃	3.2+α	1.9	0.2	2.45	頁岩	灰赤
9	SD1	磨製石鏃	3.4+α	1.8	0.2	2.25	頁岩	灰オリーブ
10	SD1	磨製石鏃	3.3+α	2.0	0.25	2.60	頁岩	灰赤
11	SD1	磨製石鏃	2.6	1.3	0.15	1.00	頁岩	灰オリーブ
12	SD1	磨製石鏃	3.6+α	1.3	0.2	1.00	頁岩	灰 (6/)
13	SD1	磨製石鏃	2.7	1.4	0.2	1.30	頁岩	灰オリーブ
14	SD1	磨製石鏃	2.25+α	1.4	0.2	0.90	頁岩	灰オリーブ
15	SD1	磨製石鏃	2.4+α	1.7	0.25	1.65	頁岩	灰オリーブ
16	SD1	磨製石鏃	3.4+α	1.6	0.1	1.50	頁岩	灰
17	SD1	磨製石鏃	1.8+α	1.95	0.2	0.95	頁岩	灰オリーブ
18	SD1	磨製石鏃	3.4+α	1.95	0.2	2.45	頁岩	灰オリーブ
19	SD1	磨製石鏃	3.0	1.6	0.2	1.75	頁岩	灰オリーブ
20	SD1	磨製石鏃	3.55	1.8	0.2	2.15	頁岩	灰オリーブ



第15図　磨製石鏃実測図

第Ⅲ章　まとめ

朴木遺跡は縄文時代中・後・晩期と弥生時代中期の遺跡であり、特に弥生時代中期末の石蓋土壙墓11基が造営される時期が最盛期である。その後は遺跡としては営まれていない。畑一枚の試掘調査のために石蓋土壙墓群の墓域としての広がりは確認できなかった。

（1）縄文時代中・後・晩期の遺物

縄文時代後・晩期の遺物としては、市来式土器・三万田式土器・御領式土器・刻目突帯文土器に伴って磨石・敲石・打製石斧・磨製石斧などが出土したが、残念ながら遺構は存在していなかった。

波状口縁部に連続する瘤状突起を巡らせ、突起の下位に棒状工具による連続刺突文を施しているA類は中期の船元式系の土器と思われる。深鉢のB～D類は三万田式土器に、E類は市来式土器（草野貝塚分類[1]のVC2類、丸野第2遺跡分類[2]のⅦd類）に、F類は御領式土器に比定される後期の土器である。G－3類は体部に屈曲があり口縁部と屈曲部に刻目突帯を有する刻目突帯文土器は山崎純男氏分類[3]の甕Ⅳ類・宇木汲田遺跡分類[4]の甕ⅢA類に相当する晩期の土器である。縄文土器は主体は三万田式土器と刻目突帯文土器の時期である。

石器は16点出土したが、その内訳は磨石・敲石が7点（43.8%）、敲石が3点（18.8%）、打製石斧が3点（18.8%）、石庖丁形石器が3点（16.8%）、磨製石斧が1点（6.2%）であり、石皿・打製石鏃・石錘を欠如している。試掘調査であるので全容を窺うことができないが、石器組成の特徴としては磨石・敲石が10点（62.5%）と木の実などの植物採集に依存する割合が高いという傾向が指摘できる。

注

①出口　浩他「草野貝塚」『鹿児島市埋蔵文化財発掘調査報告書（9）』
鹿児島市教育委員会　1988

②長津宗重・菅付和樹「丸野第2遺跡」『田野町文化財調査報告書』第11集
田野町教育委員会　1990

③山崎純男　「弥生文化成立期における土器の編年的研究－板付遺跡を中心としてみた福岡・早良平野の場合－」『鏡山猛先生古稀記念古文化論集』　1980

④横山浩一・藤尾慎一郎「宇木汲田遺跡1984年度発掘調査出土の土器について－突帯文土器を中心に－」『九州文化史研究所紀要』第31号
九州大学文学部九州文化史研究施設　1986

（2）日向における弥生時代の墓制

当遺跡で石蓋土壙墓が11基検出されたが、県内では初である。まず当地域における弥生時代の墓制を見てみる。

1．前・中期の墓制

日向における弥生時代後期以前の墓制の発掘調査としては、前期後半の樋遺跡（宮崎市吉村町江田原）と中期末の当遺跡があるのみである。

樋遺跡[1]は砂丘上に立地し、積石墓9基・小児用の甕棺3基が調査されている。積石墓は長さ・幅・深さとも約1mの規模の楕円形の土壙墓の上に砂岩を方形・長方形・楕円形に敷き

詰めている。積石墓と甕棺は混在しており、積石墓の上に供献された土器は刻目突帯文土器と板付Ⅱ式土器である。

朴木遺跡は丘陵先端部に立地し、東西方向を主軸とする石蓋土壙墓11基が発掘調査され、土壙の規模は、長さ93～145cm、幅45～66cm、深さ45～81cmで、その上に一枚の偏平な板石を載せている。土壙の規模は長さ136～145cm、幅51～63cmのａグループ（２・３・５・７・８号石蓋土壙墓）、長さ120～121cm、幅50～55cmのｂグループ（１・10号石蓋土壙墓）、長さ97～109cm、幅45～50cmのｃグループ（９・11号石蓋土壙墓）、長さ93cm、幅64cmのｄグループ（６号石蓋土壙墓）に分かれる。土壙の幅／長さの指数は６号石蓋土壙墓の0.69を除くと、0.38～0.48の間にすべて納まる。土壙の主軸はＥ－19度－ＮからＥ－16度－Ｓの間でほぼ東西方向であり、一つの原理に従って造営されている。頭位の多くは１号石蓋土壙墓で推定されるように西と推定される。また土壙の上の蓋石は11号石蓋土壙墓を除くとすべて一枚石であるが、土壙全体を覆っておらず、蓋と言うよりも標識的な性格があるかもしれない。特に１号石蓋土壙墓は、長さ120cm、幅50cm、深さ69cmの土壙の上に長さ100cm、幅58cm、厚さ16cmの一枚石を載せている。主軸はＥ－11度－Ｎでほぼ東西方向で西側が幅広であるので、頭部は西側である。床面全体から無茎磨製石鏃20点出土したのは注目される。この多量の磨製石鏃は、すべて使用済みであり、出土状況からすれば、他地域で増えつつある戦死者というより、個人の所有物である石鏃を副葬している可能性が大である。また土器供献のあり方は個人に対するものではなく、集団に対するものである。１号石蓋土壙墓のみが副葬品を有しているが、墓壙の規模では全く格差がなく、階層の析出は見られない。当石蓋土壙墓群の時期は、周辺に供献された須玖式土器の鋤先口縁の高坏・壺から中期後半に比定される。以上のように中期末の段階までは、階層の析出は見られない。

２．平野部における後期の墓制

平野部においては東平下周溝墓群[2]（川南町大字川南字東平下）・川床遺跡[3]（新富町大字新田字川床）・下屋敷１号墳[4]（新富町大字富田字下屋敷）が発掘調査されている。

東平下周溝墓群は標高90ｍの台地上に立地し、円形周溝墓８基・方形周溝墓２基・土壙墓10基で構成されており、周溝墓の規模は７～10ｍが７基、14～15ｍが３基で、周溝墓の内部主体はすべて単独である。円形周溝墓と方形周溝墓は北と南に分布域は分かれるが、近接しており、土壙墓はその間に混在している。１号周溝墓は陸橋を一つ有し、石囲い木棺に鉄刀１を副葬しているが、鏡・玉などを欠如している。２号周溝墓は組み合わせ式木棺墓を主体部としているが、副葬品はない。周溝墓と土壙墓の階層差は窺えるが、周溝墓内における階層の格差は規模の点では若干存在するが、副葬品の点ではあまり顕著ではない。このことは当共同体における限界を示している。１号周溝墓の装飾高坏と平底を残す壺から庄内式土器併行期である。

川床遺跡は標高90～92ｍの台地縁辺に立地し、周溝墓21基を含む木棺墓・土壙墓など計195基で構成されている。周溝墓の規模は、20ｍ級が３基、14～15ｍ級が７基、８～10ｍ級が９基である。北区にはＢ－49・Ｂ－136・Ｂ－168は直径20ｍ級で、50ｍ間隔で造営されており、墓域の占有が見られ、その周囲に多数の土壙墓が混在している。南区は周溝墓が19基切り合っており、その周囲に土壙墓が混在している。周溝墓の木棺墓は、二段掘りの長さ３ｍ、幅２

mのものもあるが、ほとんどは長さ1.8～2.4m、幅0.7～1.5mである。遺物としては、鉄器が195基中91点出土しているが、そのうち72点が鉄鏃である。周溝墓の内部主体はほとんど単独であり、素環頭刀・剣などを出土しており、墓域の占有及び副葬品の面からも他の木棺墓とは隔絶している。周溝墓の被葬者は共同体の首長層に、木棺墓の被葬者は共同体の構成員に比定される。首長層の鏡・玉の欠如は当共同体の限界を示している。

下屋敷1号墳は標高37mの舌状丘陵上に立地し、前方後円墳状を呈しており、全長25m、後円部径20m、同高5mである。内部主体は墓壙が2.5m×1.4mの木棺直葬である。副葬品は鉄剣1・鉄鏃1・勾玉2・管玉6・ガラス小玉2の組み合わせであり、鏡・銅鏃を欠如している。棺外に供献された壺形土器は卵形の体部に大きく開いた頸部および直立した複合口縁を持ち、底部は丸底である。布留式土器併行期の土器に比定される。

以上のように平野部における定型化する古墳以前の墓制は、弥生後期後葉の時期に川床遺跡では内部主体単独の直径20m級の周溝墓が出現し、墓域の占有及び副葬品の点で他の木棺墓との間に格差が生じている。後期末葉になると東平下周溝墓群でも内部主体単独の15m級の周溝墓が出現するが、周溝墓内における格差が生じている。布留式土器併行期になると下屋敷1号墳では30m級の前方後円墳状を呈しているが、鏡・銅鏃を欠如している。なお発掘調査した定型化した前方後円墳としては4世紀末の西都原13号墳[5]（西都市）がある。13号墳は主軸長78.5mの前方後円墳で、内部主体は竪穴式石室ではなくて粘土槨で、倣製の三角縁神獣鏡・勾玉・ガラス小玉・鉄剣・刀子が出土している。大淀3号墳[6]（宮崎市）は後円部径40.0m、同高さ5.5m、周溝幅9.5m、同深さ0.9mで、前方後円墳型に周溝が巡る。周溝から出土した壺形埴輪から4世紀末に比定される。内部主体は発掘調査されていないので、不明である。日向の平野部において定型化する古墳の出現までの間の布留式土器併行期～4世紀末の様相については、発掘調査が行われていないので不明であるが、持田古墳群出土の舶載三角縁神獣鏡が出土している点から考えれば、前代の墓制から定型化した前方後円墳の間には他地域と同様に隔絶している。

3．山間部における後期～古墳初頭の墓制

山間部においては大萩遺跡[7]（野尻町大字三ヶ野山字西柿川内）・小木原遺跡蕨地区[8]（えびの市大字上江字蕨）が発掘調査されている。

大萩遺跡の土壙墓群は標高35～40mの河岸段丘上に立地し、17基で構成されており、その内の4・10号墓は木棺墓の可能性が指摘されている。17基の土壙墓は、土壙のプランと真ん中の空白地帯の存在より長方形プランのA群（4～10号墓）と楕円形プランのB群（1～3号墓・11～17号墓）に分かれる。土壙墓の規模は15・16号墓（aグループ）の2基だけが長さ2mを越えているのに対して、長さ160～180cm、幅75～100cmのbグループ（4・7・10・12号墓）、長さ120～150cm、幅50～80cmのcグループ（1～3・5・6・9・11・14・17号墓）、長さ90～100cm、幅40～60cmのdグループ（8・13号墓）に分かれる。土壙墓の規模と構造の点では格差はないが、4号墓はガラス小玉580、5号墓は貝輪3～4、6号墓はガラス小玉61を副葬している点と個人に対する土器供献（重弧文土器・壺・高坏・器台など）が行われている点で他の土壙墓との階層差が推定される。また4～6号墓の周辺にも土器供献が行われており一種の区画墓的様相を呈している。他の土器供献も細かく見ていけば2～

4基の小群に対する土器供献である。他の土壙墓が一般共同体成員の集団墓であるのに対して、4～6号墓は集団墓から未だとびだせないままの優位小群墓である。当共同体では玉を保有しているが、鉄器を副葬していないことは、当共同体の性格を暗示している。集落とは小さな谷を挟んで、150mの間隔である。

小木原遺跡蕨地区は、川内川左岸には支流である池島川に挟まれた標高260～270mの中位段丘の西端に位置し、東側に開析谷が深く入り込み、やや突出した立地を呈している。圃場整備事業に伴って土壙墓52基・組み合わせ式木棺墓6基・「横口系の竪坑を持つ地下式横穴墓（横口式土壙）」9基・地下式横穴墓24基・板石積石室墓8基で構成されたA地区と地下式横穴墓43基のB地区に分かれる。A地区の木棺墓は長側板と小口板の両方の溝を掘り込んだ組み合わせ式の木棺墓で、小口板が長側板の内側に入り込むタイプである。土壙墓の規模は、長軸が180～190cmの超大型クラス、150～170cmの大型クラス、110～140cmの中型クラス、90～100cmの小型クラスに分けられており、平均は長さ130cm、幅50cmである。副葬品は少なく58基のうち22%の13基から鉄剣4・鉄鏃22～23・管玉1が出土しており、1基から鉄鏃1～3本である。鉄器・玉類の副葬は見られるが、鏡を欠如している。土壙墓の時期は弥生時代に見られる古手の鉄鏃が見られないことから4世紀に比定されている。当共同体においては有力な首長層の析出は見られない。一方、板石積石室墓は4世紀中葉～後半に、「横口系の竪坑を持つ地下式横穴墓」は4世紀後半に、他の地下式横穴墓は5世紀後半～6世紀後半に比定されている。

以上のように山間部における定型化する古墳以前の墓制は、弥生後期後葉～末葉の大萩遺跡では、集団墓から未だ飛び出せないままの優位小群墓があり、一種の区画墓的な土壙墓の存在が想定されるが、平野部に見られる周溝墓は造営されていない。弥生後期末葉～古墳初頭の蕨遺跡でも土壙墓群が存在するが、有力な首長層の析出は見られない。山間部において周溝墓が造営されていない（必要性がなかったことを含めて）ことは、平野部と対照的に古墳時代における前方後円墳が5世紀後半以降に僅か4基というの稀薄さと密接な関係があると思われる。それは山間部における社会・経済及び共同体の限界に他ならない。

4．まとめ

以上のように日向における弥生時代後期から古墳時代初頭までの平野部と山間部の墓地の様相は異なっている。一方、後期後葉～末葉の大萩遺跡の土壙墓で見られる集団墓から未だ飛び出せない優位小群墓と一般共同体成員の階層差が推定されるのに対して、山間部における中期後半の墓地である朴木遺跡は石蓋土壙墓の集団墓において階層差が見られないことは、時期における発展段階を示している可能性がある。また土壙の規模では大萩土壙墓群のa・bグループが朴木石蓋土壙墓群にはない点と幅が大きくなる点に相違が見られることは、棺構造及び時期の相違と考えられる。なお当該期における調査された墓地が少ないので、今後の調査に期待される。

注

①日本考古学協会編「橿遺跡」『日本農耕文化の生成』　1960

②日高正晴・山中悦雄「東平下周溝墓群－2号方形周溝墓－」
『川南町文化財発掘調査報告』1　川南町教育委員会　1982

日高正晴・岩永哲夫「東平下1号円形周溝墓」『宮崎県文化財調査報告書』第29集
宮崎県教育委員会　1986
③有田辰美「川床遺跡」『新富町文化財調査報告書』第5集　新富町教育委員会　1986
④新富町教育委員会「新富町・下屋敷1号墳発掘調査中間報告」『宮崎考古』第9号
宮崎考古学会　1984
⑤宮崎県　『西都原古墳調査報告書（1～3）』　1915・1918・1926
⑥長津宗重「大淀3号墳」『宮崎県文化財調査報告書』第31集　宮崎県教育委員会 1984
⑦石川恒太郎・田中　茂「大萩遺跡（1）」『瀬戸ノ口地区特殊農地保全整備事業に伴う
埋蔵文化財文化財発掘調査報告』宮崎県教育委員会　1975
⑧永友良典「小木原遺跡群蒙地区（A・B地区）」『えびの市埋蔵文化財調査報告書』
第6集　1990

（3）弥生土器

当遺跡から出土した弥生土器は甕がⅠ～Ⅷ類に、壺がⅠ～Ⅴ類に、高坏がⅠ～Ⅲ類に分かれる。

高坏は坏部の上半部が丸みを持ち、口縁部が水平に伸びる断面鍬形の平坦な口縁部の特徴から須玖Ⅱ式土器[1]に相当する。広口壺Ⅱ類も鍬形口縁部の特徴から須玖Ⅱ式土器に相当する。

甕Ⅰ類は石川悦雄氏編年[2]のⅡa期に、甕Ⅱ類はⅡb期に相当する。甕Ⅵ類は所謂「肥後型土器」[3]の甕である。土器の主体は中期前半～末の時期である。

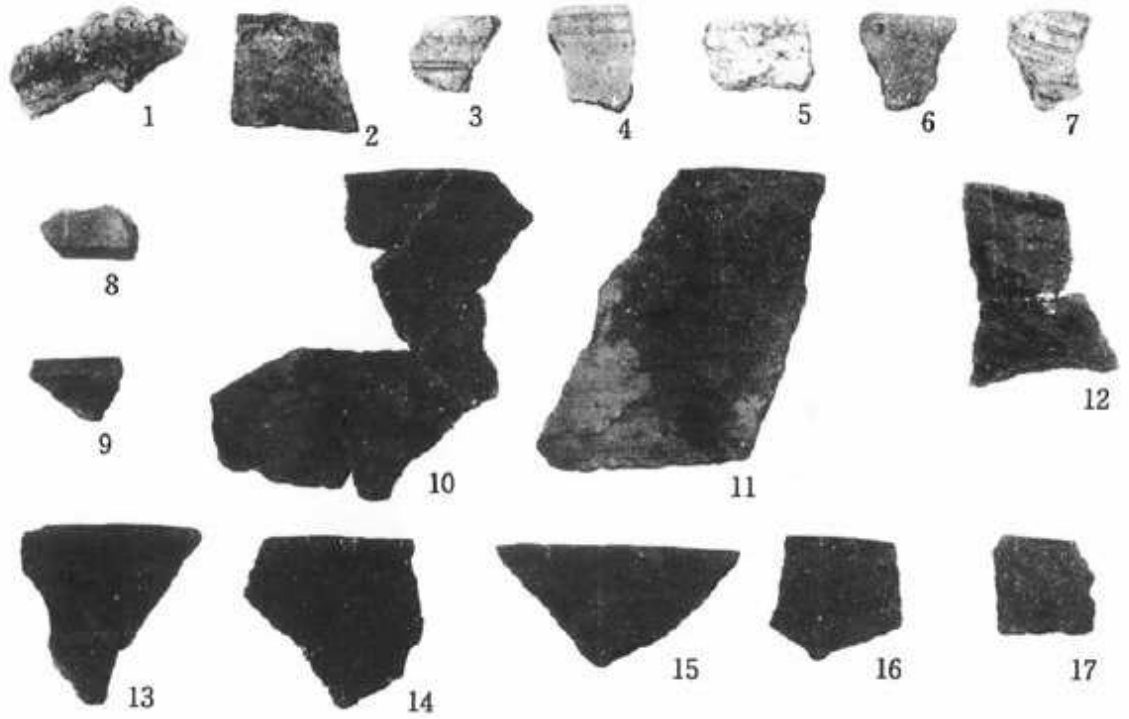
大萩遺跡では個人に対する土器供献と2～4基の土壙墓に対する土器供献の二通りが見られるが、当遺跡の出土状況からすれば2～4基の石蓋土壙墓に対する土器供献の可能性が高い。

注

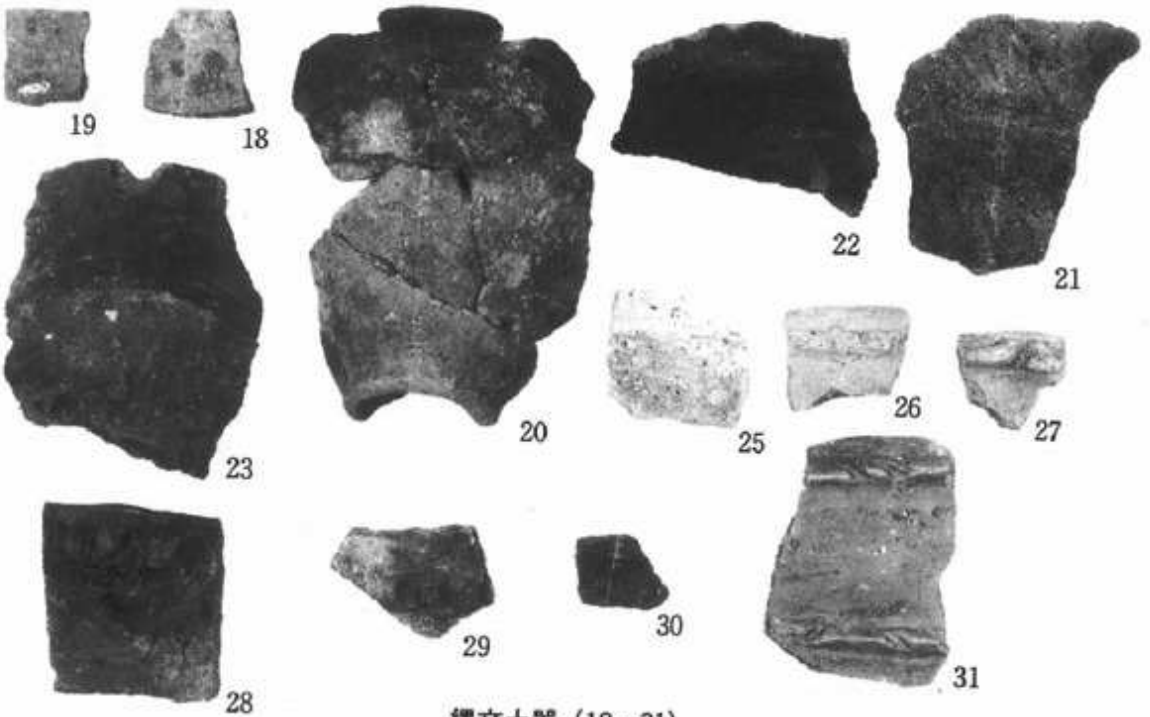
①武末純一「須玖式土器」『弥生文化の研究』4　雄山閣　1987
②石川悦雄「宮崎平野における弥生土器編年試案－素描（Mk.Ⅱ）」『宮崎考古』
第9号　宮崎考古学会　1984
③玉永光洋「豊後における肥後型土器について」『九州考古学』第57号　九州考古学会
1985

以上のように当遺跡は試掘調査のために調査面積は限られたが、石蓋土壙墓が11基も検出され、日向において全く不明であった弥生時代中期の墓地の様相の一部が明らかになったことは大きな成果であった。しかし、墓地の変遷や広がりなどは試掘調査のために不明であるので、今後の調査に期待される。

図版1

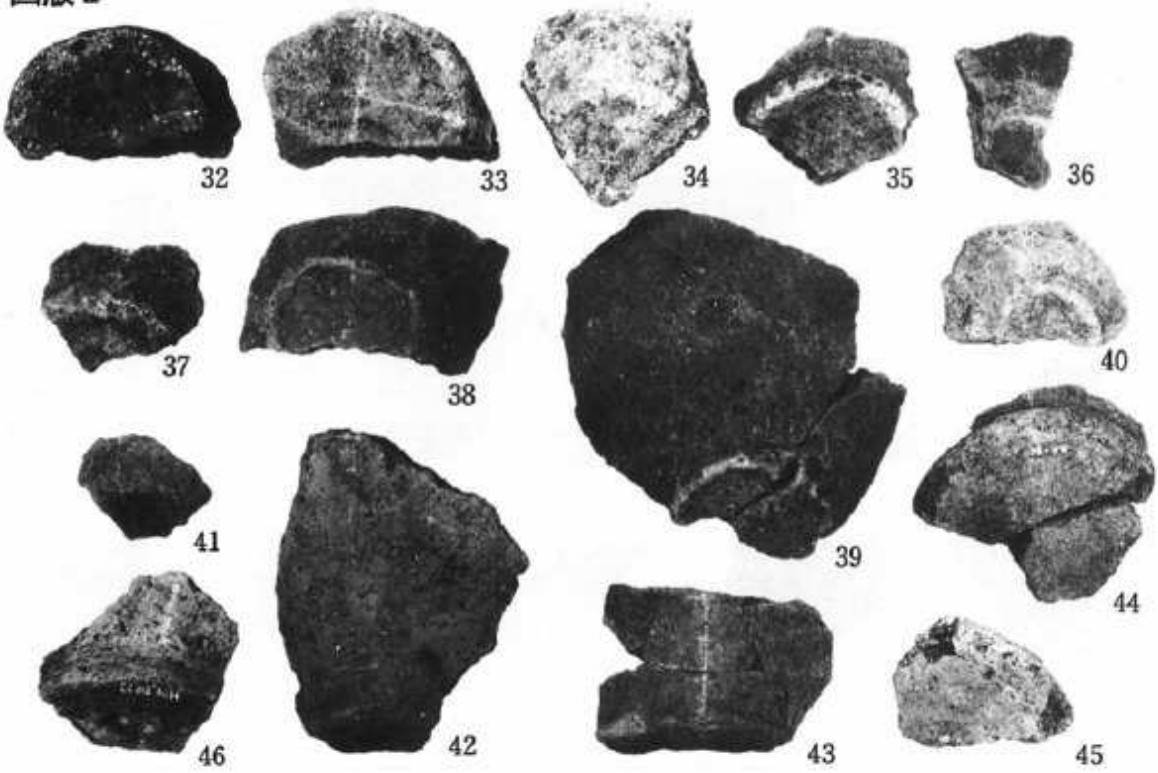


縄文土器（1～17）

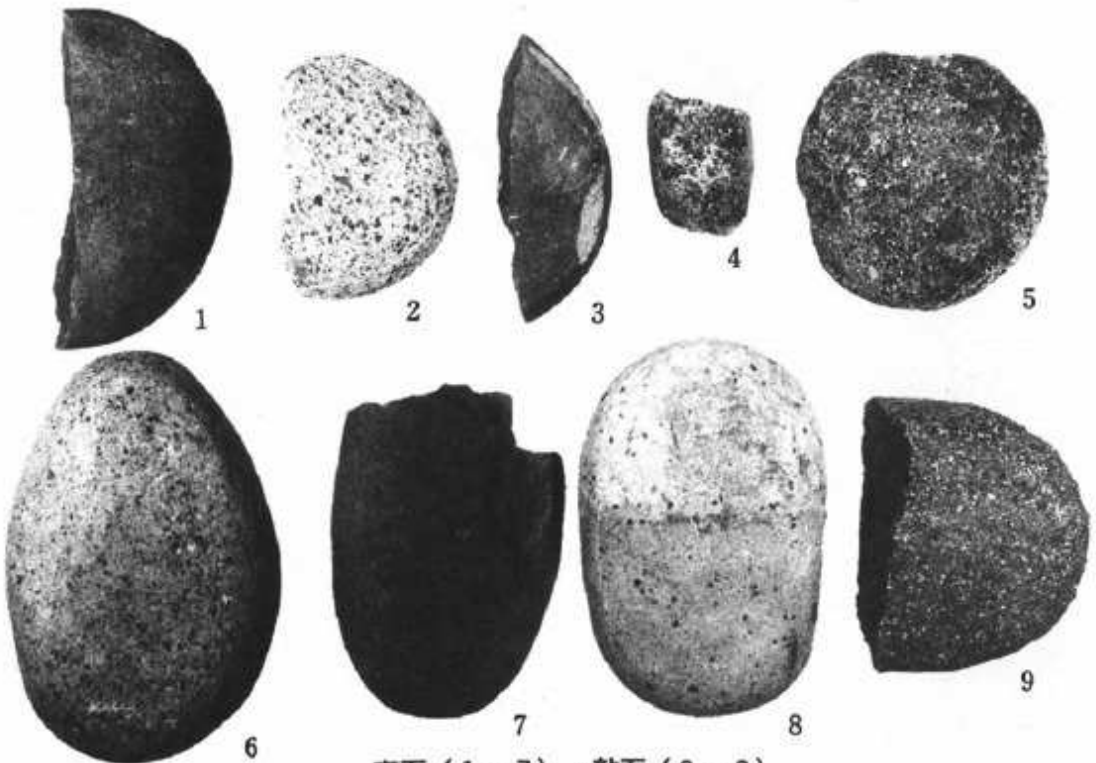


縄文土器（18～31）

図版２

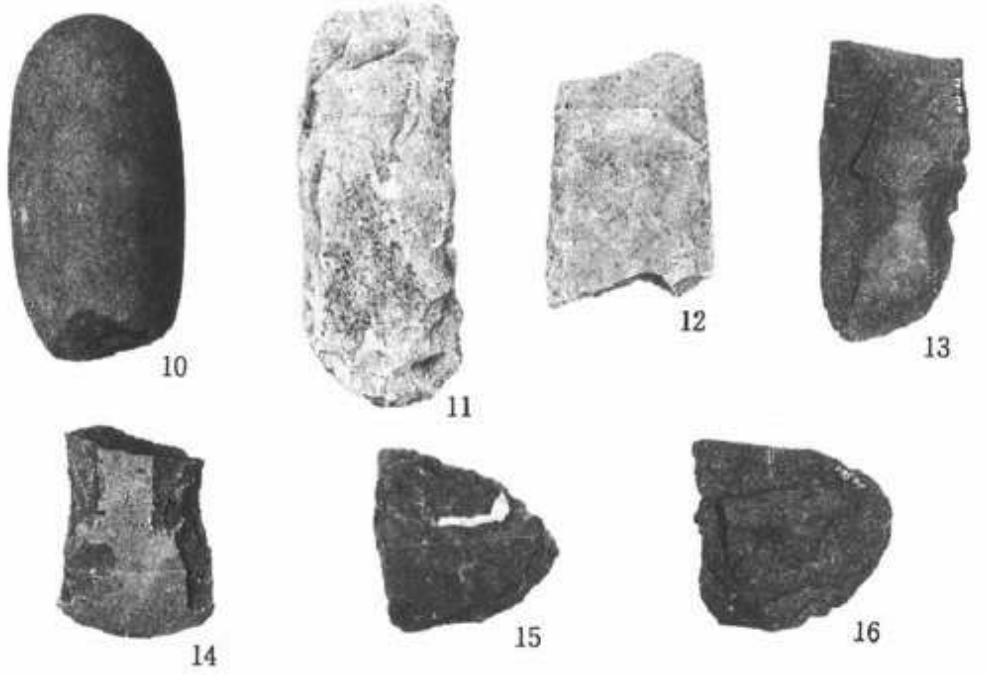


縄文土器（32～45）

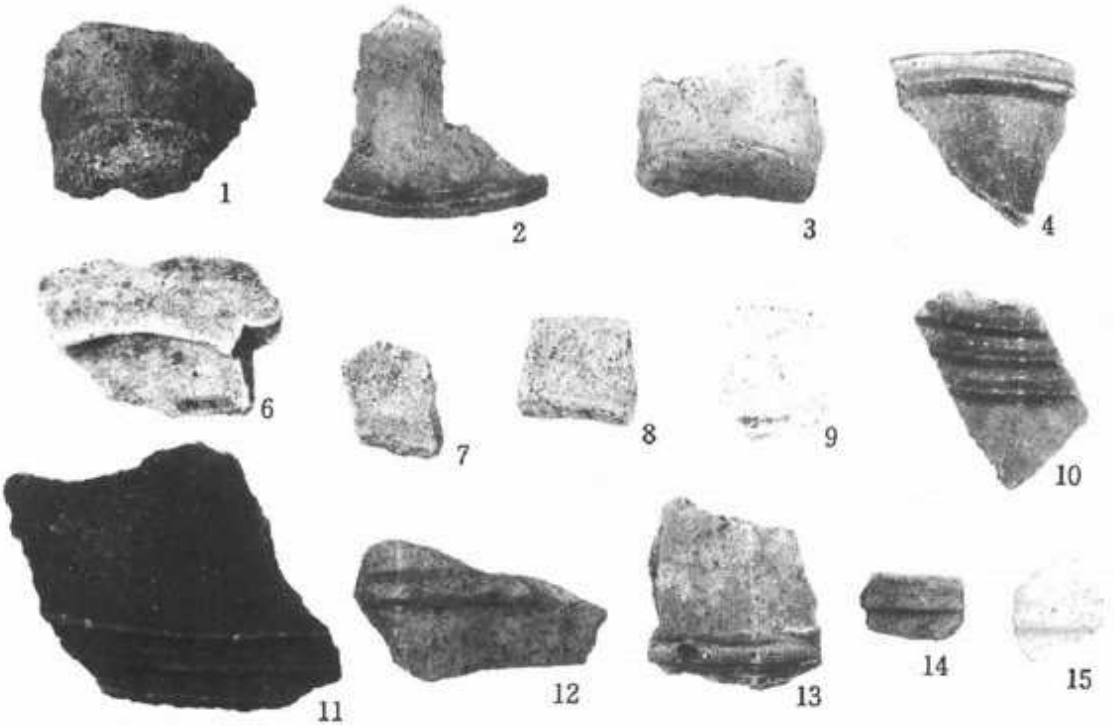


磨石（１～７）・敲石（８・９）

図版 3

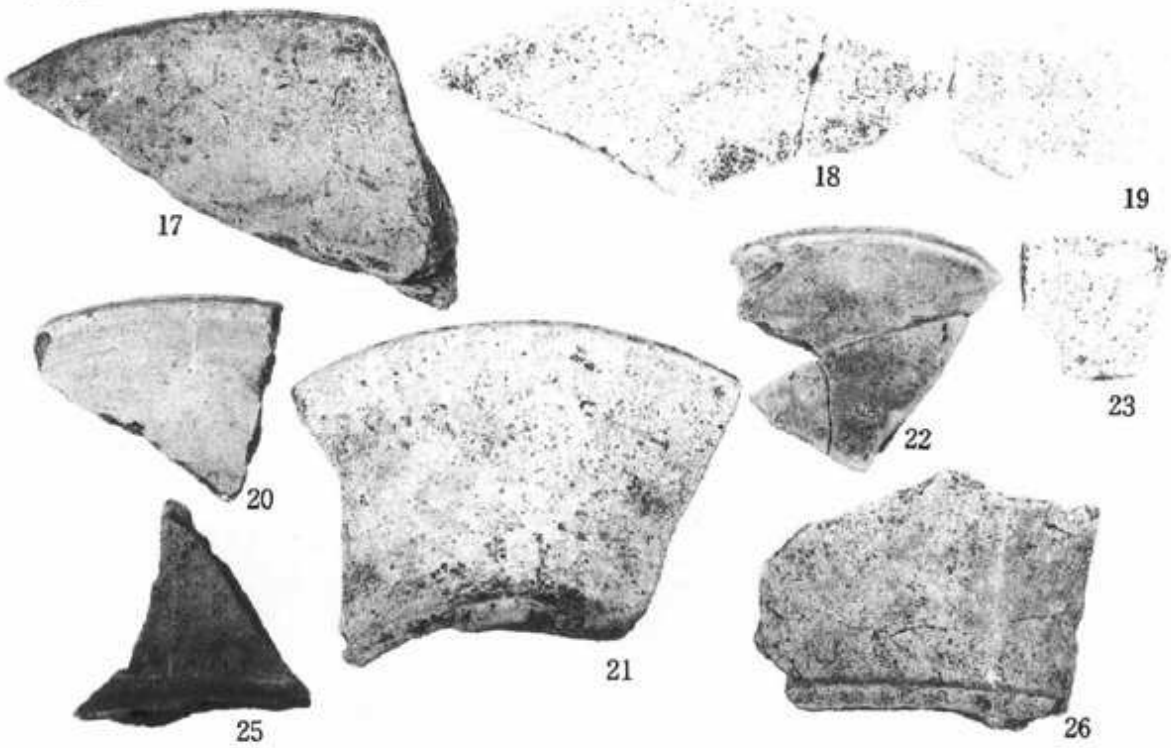


敲石（10）・扁平打製石斧（11～13）・磨製石斧（14）・石庖丁形石器（15・16）

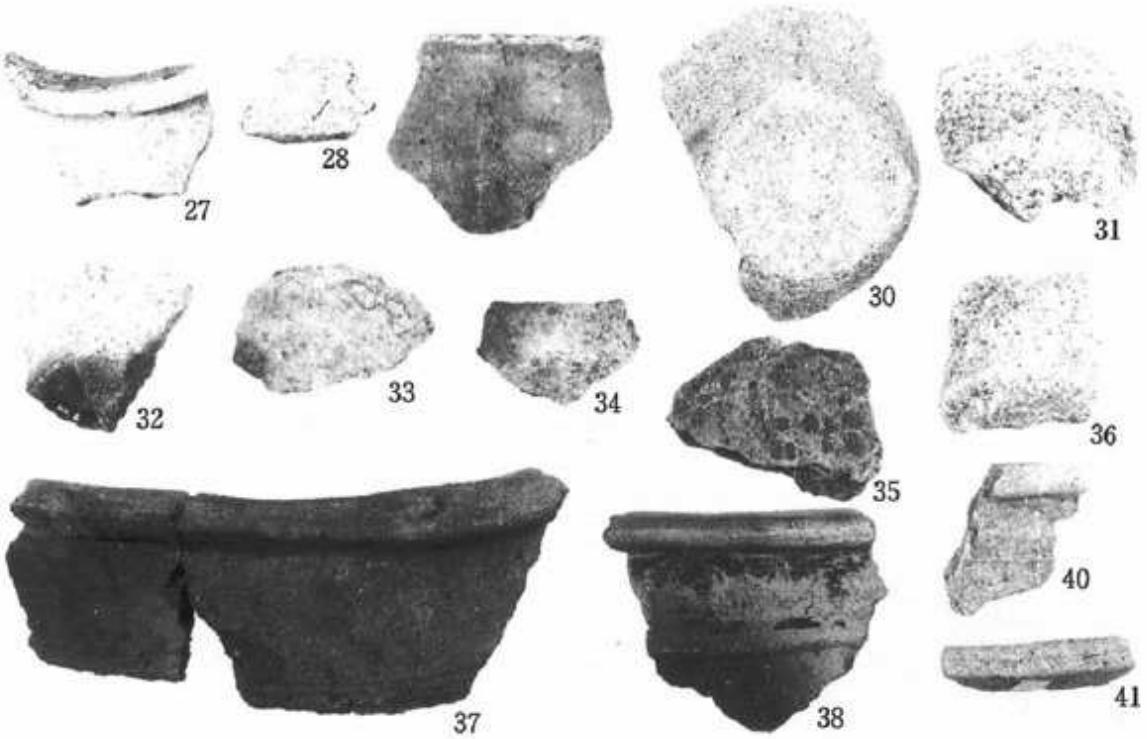


弥生土器（1～15）

図版 4

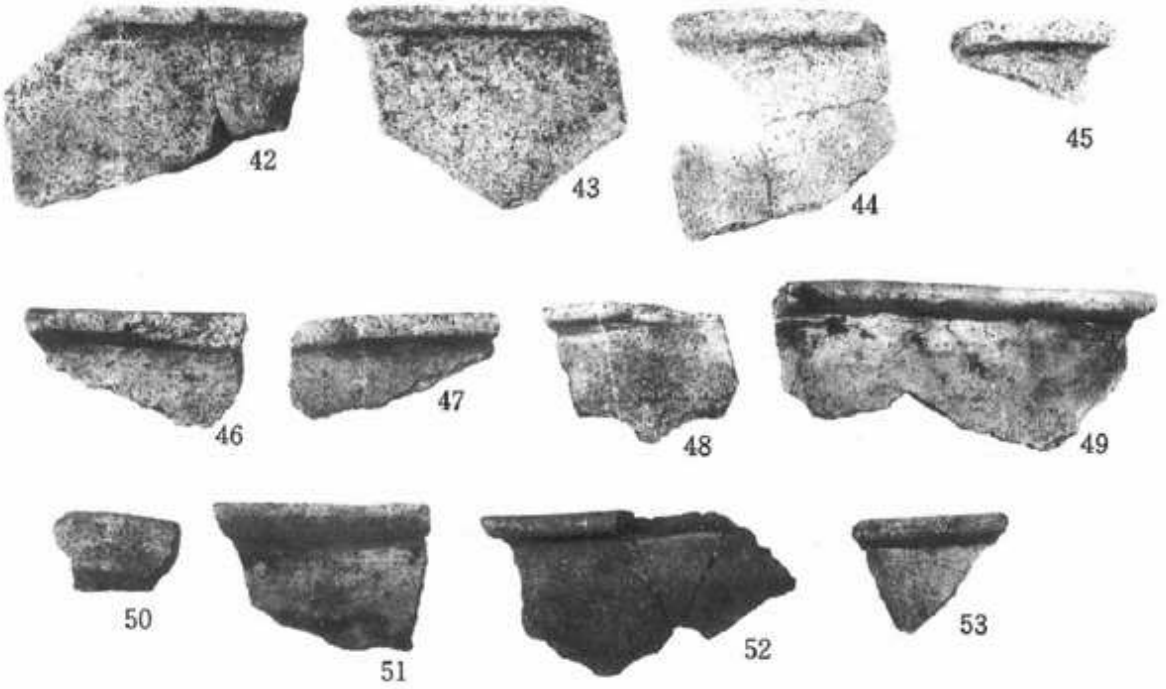


弥生土器（17～26）

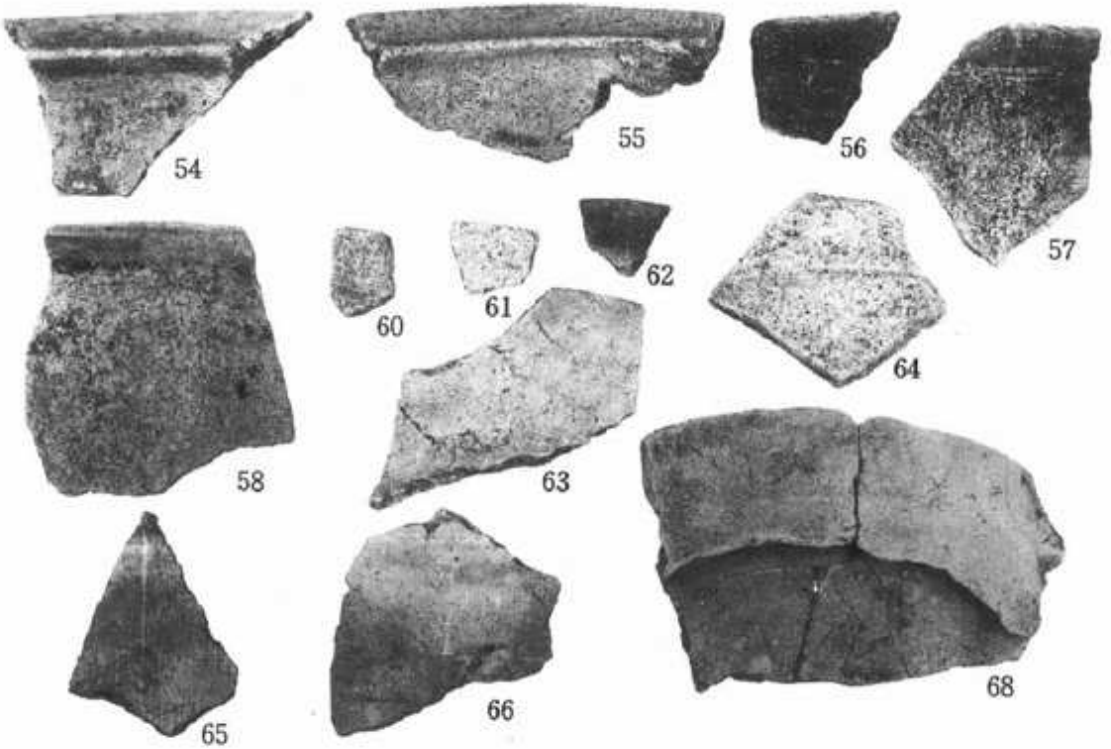


弥生土器（27～41）

図版 5

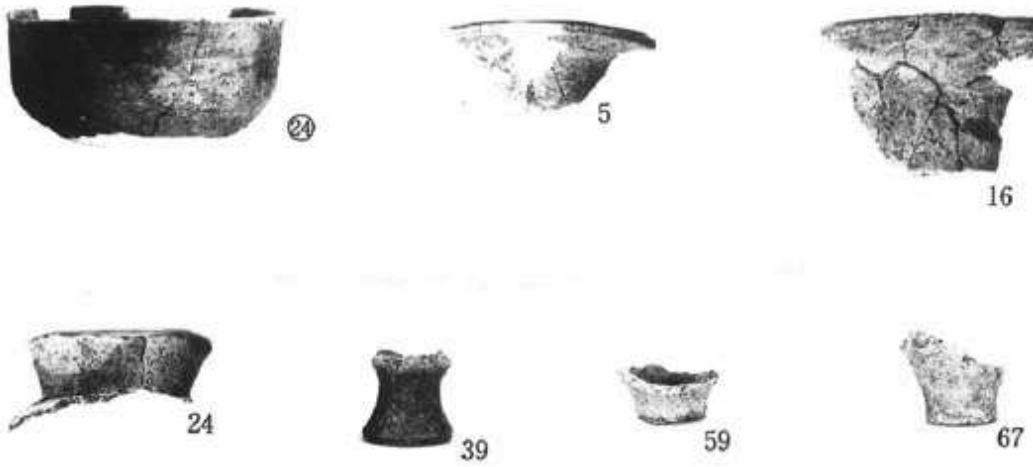


弥生土器（42～53）

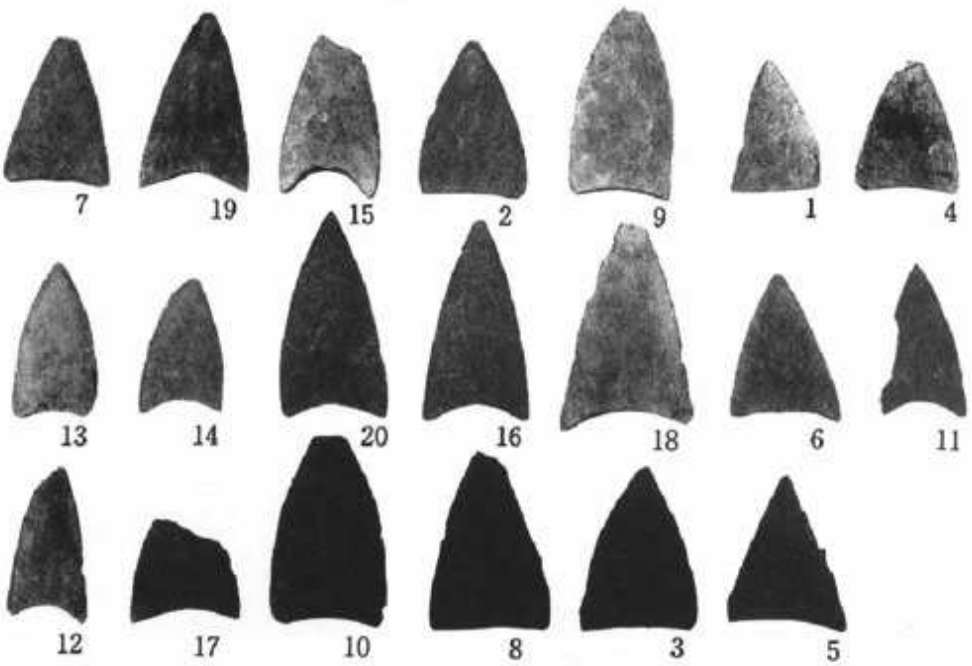


弥生土器（54～68）

図版6



縄文土器（24）・弥生土器（5・16・24・39・59・67）



SD1　出土磨製石鏃

図版7

SD2

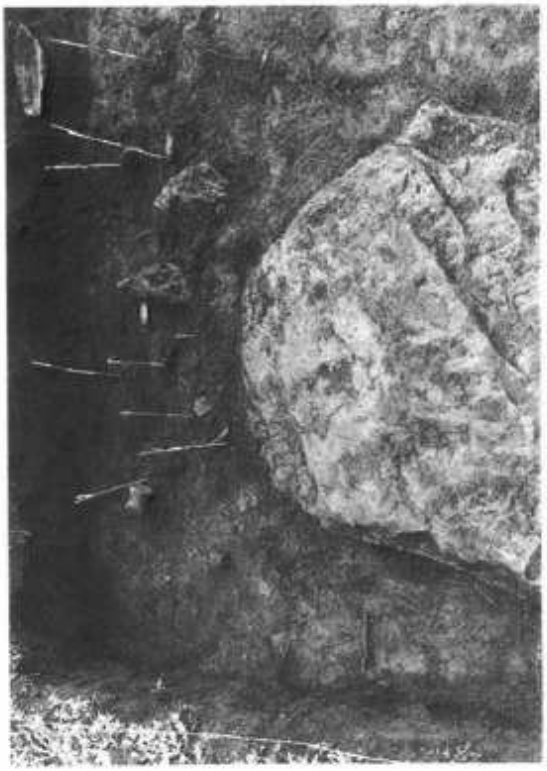
SD3

SD1

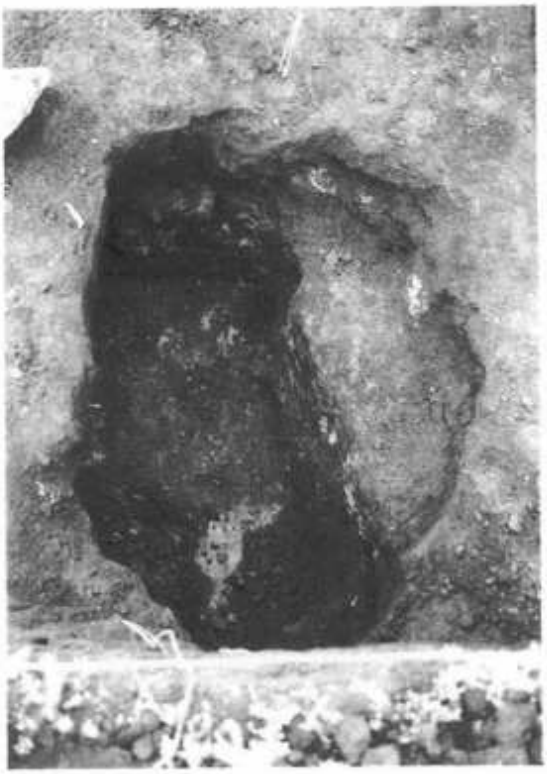
SD1

図版 8

T—10 SD5・11



SD5



SD3

SD4

図版9

SD6

SD7

SD5

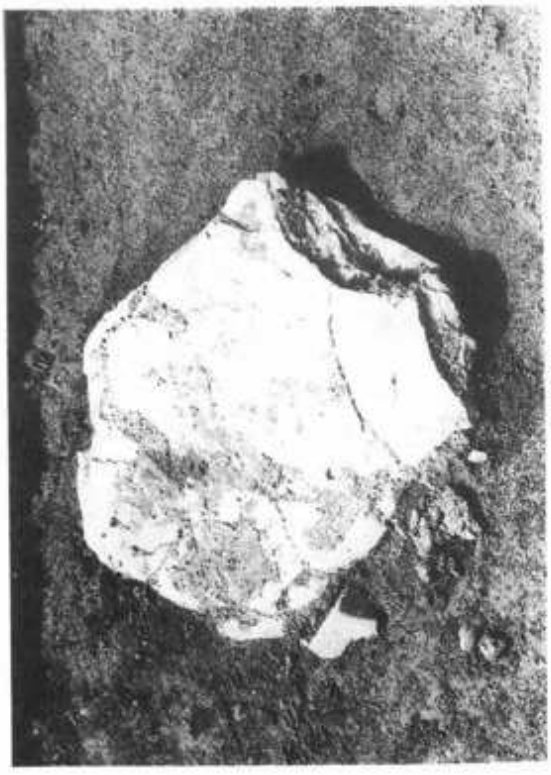
T−2　SD6・SD7

図版10

SD9

T－6　SD10

SD8



SD9

図版11

SD11

SD10

SD11

高崎町文化財調査報告書

第 4 集

朴 木 遺 跡

発行年月日　平成5年3月31日
発　　行　高崎町教育委員会
印　　刷　美 峰 堂 印 刷

SR
45
*401